京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　二〇一三－一六　平安京左京八条一坊十六町跡

# 平安京左京八条一坊十六町跡

2014年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

# 平安京左京八条一坊十六町跡

2014年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

# 序　　文

京都市内には、いにしえの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、共同住宅建設工事に伴う平安京跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

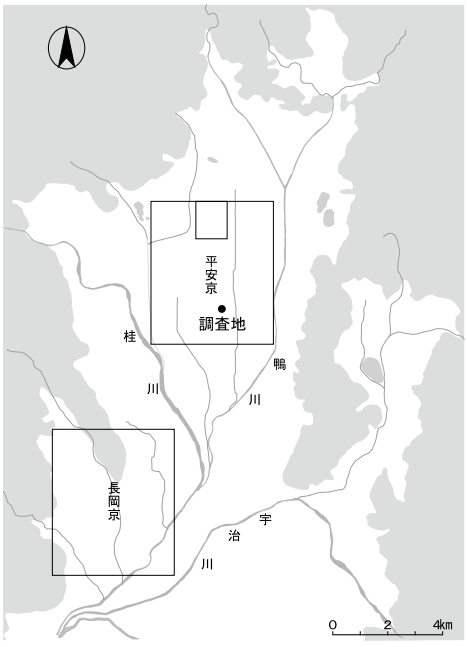
平成26年６月

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

所　長　　井　上　満　郎

# 例　　言

| | | |
|---|---|---|
| 1 | 遺　跡　名 | 平安京跡　（文化財保護課番号　13 H 397） |
| 2 | 調査所在地 | 京都市下京区七条通大宮西入花畑町86、86－1 |
| 3 | 委　託　者 | 株式会社　太陽総合鑑定所　代表取締役　渡辺直人 |
| 4 | 調 査 期 間 | 2014年２月17日～2014年３月19日 |
| 5 | 調 査 面 積 | 190㎡ |
| 6 | 調査担当者 | モンペティ恭代 |
| 7 | 使 用 地 図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺１：2,500）「島原」、「梅小路」を参考にし、作成した。 |
| 8 | 使用測地系 | 世界測地系　平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 | 使 用 標 高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 | 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』に準じた。 |
| 11 | 遺 構 番 号 | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。 |
| 12 | 遺 構 規 模 | 特に断らない限り、遺構検出面での規模を記載する。深さも検出面からの深度を示した。 |
| 13 | 遺 物 番 号 | 通し番号を付し、写真番号も同一とした。 |
| 14 | 本 書 作 成 | モンペティ恭代 |
| 15 | 備　　考 | 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員および資料業務職員があたった。 |




（調査地点図）

# 目　　次


１．調査経過 …… 1
（１）調査に至る経緯 …… 1
（２）発掘調査の経過 …… 2
２．遺跡の概要 …… 3
（１）位置と環境 …… 3
（２）周辺の調査 …… 3
３．遺　　構 …… 5
（１）基本層序 …… 5
（２）遺構の概要 …… 5
（３）第２期の検出遺構 …… 7
（４）第１期の検出遺構 …… 10
４．遺　　物 …… 17
（１）遺物の概要 …… 17
（２）土器類 …… 17
（３）瓦類 …… 29
（４）漆製品 …… 29
（５）銭貨 …… 30
（６）石製品 …… 30
５．ま と め …… 31
（１）遺構の変遷 …… 31
（２）埋甕遺構について …… 33


# 図　版　目　次


図版１　遺構　１　第２期全景（南東から）
２　井戸262（西から）
３　井戸311（西から）
図版２　遺構　１　第１期全景（南東から）
２　井戸263上層遺物出土状況（東から）
３　井戸312検出状況（南から）

図版３　遺構　１　埋甕遺構Ａ（北から）
２　埋甕遺構Ｂ（東から）
３　埋甕遺構Ｃ（北西から）
４　土坑282（東から）
図版４　遺物　出土土器類１
図版５　遺物　出土土器類２
図版６　遺物　出土土器類３、漆製品、銭貨、石製品
図版７　遺物　埋甕遺構出土陶器甕１
図版８　遺物　埋甕遺構出土陶器甕２

# 挿　図　目　次

図１　調査地位置図および周辺の調査地点（１：2,500）　…… 1
図２　調査区配置図および四行八門位置関係図（１：500）　…… 2
図３　調査前全景（北東から）　…… 2
図４　作業風景（南東から）　…… 2
図５　調査区西壁断面図（１：50）　…… 6
図６　調査区南壁断面図（１：50）　…… 7
図７　第２期平面図（１：100）　…… 8
図８　土坑272断面図（１：40）　…… 9
図９　井戸262・263実測図（１：50）　…… 9
図10　井戸305・311実測図（１：50）　…… 10
図11　第１期平面図（１：100）　…… 11
図12　土坑229断面図（１：20）　…… 12
図13　土坑285断面図（１：40）　…… 12
図14　井戸312実測図（１：50）　…… 13
図15　埋甕遺構Ａ（埋甕26・170・173・176・186・250）実測図（１：40）　…… 14
図16　埋甕遺構Ｂ（埋甕129）実測図（１：40）　…… 15
図17　埋甕遺構Ｃ（埋甕125・265）実測図（１：40）　…… 15
図18　埋甕125大甕出土状況（北西から）　…… 16
図19　落込み165断面図（１：40）　…… 16
図20　出土土器類実測図１（１：４）　…… 18
図21　輸入白磁椀３高台内赤外線写真　…… 19

図22　輸入白磁椀46高台内赤外線写真 …… 20
図23　出土土器類実測図２（１：４） …… 21
図24　出土土器類実測図３（１：４） …… 22
図25　出土土器類実測図４（１：８、131・132のみ１：４） …… 24
図26　出土土器類実測図５（１：８） …… 25
図27　出土土器類実測図６（１：８） …… 26
図28　大甕134内外面に漆を施した部分 …… 27
図29　大甕135ひび割れ部に漆を施した痕跡 …… 28
図30　出土土器類実測図７（１：４） …… 28
図31　出土軒瓦拓影・実測図（１：４） …… 29
図32　出土漆製品実測図（１：４） …… 29
図33　出土銭貨拓影（１：１） …… 30
図34　出土石製品実測図（１：４） …… 30
図35　左京八条一坊十六町宅地変遷推定図 …… 31
図36　遺構変遷図（１：200） …… 32
図37　大甕135内検出種実・骨 …… 34

# 表　目　次

表１　周辺の調査一覧表 …… 4
表２　遺構概要表 …… 5
表３　遺物概要表 …… 17
表４　大甕135内検出種実・骨一覧表 …… 34
表５　土器類観察表 …… 36
表６　軒瓦観察表 …… 42
表７　銭貨観察表 …… 42

# 平安京左京八条一坊十六町跡

## １．調査経過（図１～４）

### （１）調査に至る経緯

調査地は、平安京左京八条一坊十六町にあたり、七条大路に面した宅地内に位置する。調査地の北東には平安京造営時に４町を占める東市が設置されており、その四方には外町が形成された。また当地周辺は12～13世紀にかけての土地売買文書が多く残されている所でもある。

周辺ではこれまでに多くの発掘調査や立会調査が行われており、平安時代の井戸・土坑・柱穴、鎌倉時代から室町時代の井戸・溝・土坑などを検出している。また、古墳時代の土器が出土している。このため、当該地でも、同様の遺構が検出される可能性が高いと考えられた。開発に先立って、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）によって試掘調査が実施され、平安時代と考えられる整地層、鎌倉時代から室町時代の土坑、時期不明のピッ

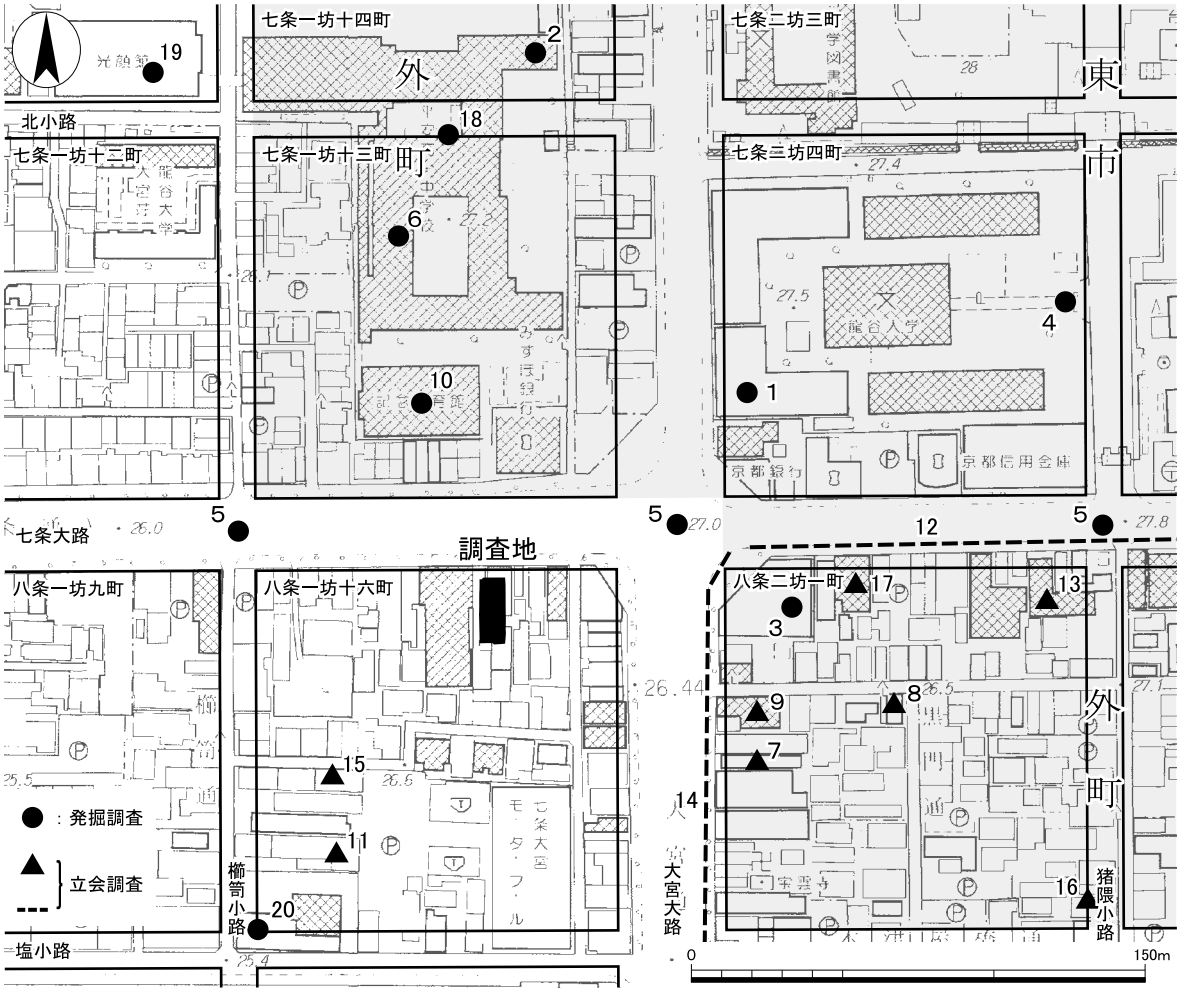



図１　調査地位置図および周辺の調査地点（１：2,500）

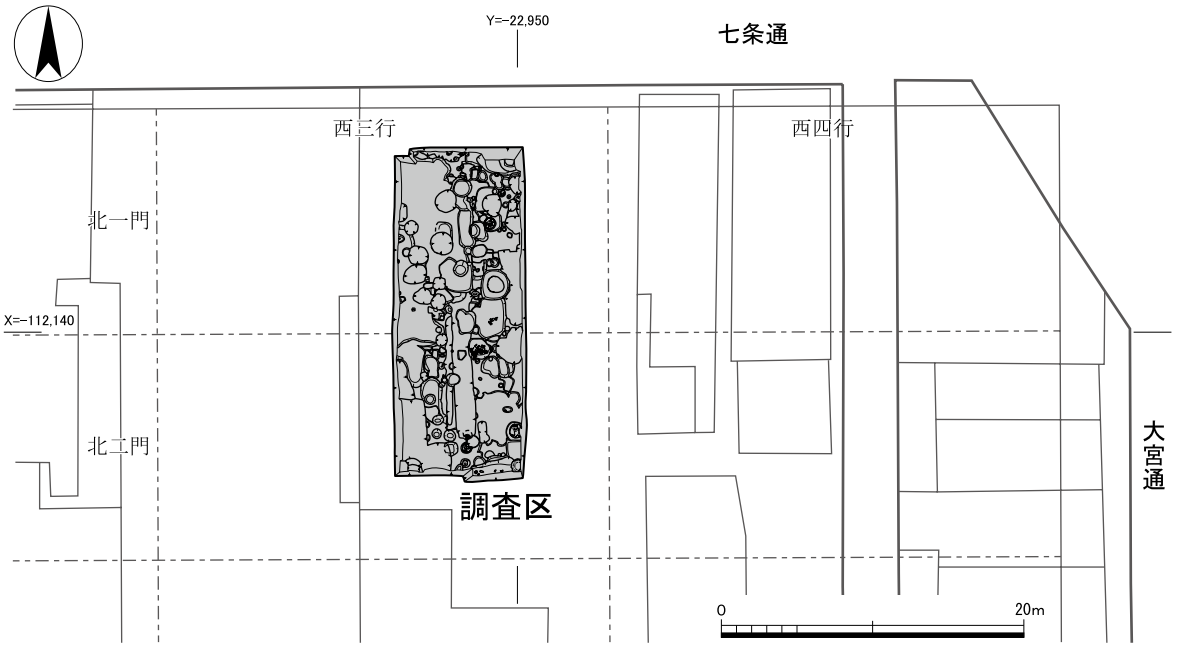



図２　調査区配置図および四行八門位置関係図（１：500）

図３　調査前全景（北東から）

図４　作業風景（南東から）

トなどの遺構が良好に遺存していることが確認された。この成果を基に文化財保護課は発掘調査が必要との指導を行い、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受け、発掘調査を実施することとなった。

## （２）発掘調査の経過

発掘調査区は、文化財保護課の指導の下、建物建設予定地と試掘調査成果を考慮して、約190㎡を設定し、調査は2014年２月17日から開始した。遺構面直上までは重機によって掘削を行い、その後の遺構の掘削および精査は人力によって行った。適宜、平面図・断面図など、必要な図面の作成と写真撮影による記録作業を実施した。調査終了後は、埋め戻しを行い、３月19日に現場での作業をすべて終了した。

# ２．遺跡の概要

## （１）位置と環境

当調査地は、鴨川扇状地の上に立地しており、現地表面はほぼ平坦である。この地の東には烏丸町遺跡、北東には烏丸綾小路遺跡などの弥生時代から古墳時代にかけての大規模な集落が形成されていた。周辺での調査では、古墳時代初めの土器が見つかっている。

延暦十三年（794）の平安京への遷都に伴い、当地は平安京左京八条一坊十六町に位置する。条坊制をさらに細分する四行八門制では、北一・二門西三行にあたり、十六町の北東部で北の七条大路に接する（図２）。平安京造営時には調査地の北東、左京七条二坊に東市が設置されており、文献史料などによると東市の周囲には外町が形成され、賑わったという。平安時代末期には、左京八条一坊の南半に平清盛の西八条第が造営されるが、今回の調査地は八条一坊の北東隅で西八条第からは外れている。12～13世紀にかけて、この地に関しての多くの土地売買文書が残されている[1)]。また、七条大宮の地では観応三年（1352）閏２月、南朝の後村上天皇の軍が八幡から京都に入り、足利義詮軍と戦い、これを敗るという記録[2)]がある。

## （２）周辺の調査（図１、表１）

調査地周辺では、これまでに多くの発掘・立会調査が行われている。今回の調査に近接する主要な調査として、まず十六町内での発掘調査（調査20）が挙げられる。平安時代の土坑や柱穴、鎌倉時代から室町時代の塩小路・櫛笥小路側溝を検出している。また、古墳時代の土器が出土している。

七条通の発掘調査（調査５）では、平安時代後期から鎌倉時代の溝、鎌倉時代から室町時代の溝などを検出している。

調査地北の平安中・高等学校校内では５回の発掘調査（調査２・６・10・18・19）が行われ、平安時代の井戸・土坑・溝、鎌倉時代の井戸、室町時代の井戸・土坑などが検出されている。

調査地北東の東市にあたる龍谷大学構内での発掘調査（調査１・４）では、平安時代の井戸・溝などを検出している。また、古墳時代の土器が出土している。

調査地東での発掘調査（調査３）では、未報告であるが、平安時代の土坑、溝、室町時代の土坑、常滑の大甕を利用して構築した井戸などを検出している。

立会調査では調査11で鎌倉時代の遺物包含層を検出した他、路面などを検出している。

なお、主な調査成果については図１、表１にまとめた。

表１　周辺の調査一覧表

| No. | 所在地 | 調査方法 | 調査年月日 | 調査概要 | 文　献 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 七条猪隈通上る大工町 | 発掘 | 1974.12.23～1975.2.14 | 平安時代後期の井戸・溝、室町時代の井戸、江戸時代の瓦溜などを検出。中近世の遺物の他に古墳時代の土器が出土。 | 『龍谷大学構内発掘調査報告書』龍谷大学校地学術調査委員会1980 |
| 2 | 北小路通大宮西入御器屋町30 | 発掘 | 1976.5.5～5.20 | 平安時代～戦国時代の井戸を検出。 | 未報告 |
| 3 | 七条大宮東入大工町95 | 発掘 | 1976.5.22～6.17 | 平安時代の土坑・溝、室町時代の土坑、常滑の大甕を利用して構築した井戸などを検出。 | 未報告 |
| 4 | 七条猪隈通上る大工町 | 発掘 | 1977.7.1～7.25 | 近世の土坑を検出。近世の土器類・瓦類・泥面子・伏見人形・銭貨などが出土。 | 『重要文化財龍谷大学正門』龍谷大学校地学術調査委員会1977 |
| 5 | 七条通（櫛笥通～堀川通） | 発掘 | 1978.2.28～3.16 | 平安時代後期～鎌倉時代の溝、鎌倉時代～室町時代の溝などを検出。弥生時代～近世の遺物が出土。 | 『昭和52年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所2011 |
| 6 | 北小路通大宮西入御器屋町30 | 発掘 | 1981.6.29～7.16 | 平安時代後期の井戸・溝、鎌倉時代の井戸、室町時代の井戸・溝・土坑、江戸時代の瓦溜などを検出。 | 『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』(財)京都市埋蔵文化財研究所1983 |
| 7 | 大宮通七条下る上之町421-3 | 立会 | 1982.8.31～9.3 | 表土下1.0m以下にて室町時代の遺物を包含する旧河川の堆積を検出。 | 『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和57年度京都市文化観光局1983 |
| 8 | 黒門通木津屋橋上る徹宝町413-1 | 立会 | 1883.1.25 | 表土下1.1mにて鎌倉時代前期の土坑５基、室町時代の土坑１基を検出。 | 『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和57年度京都市文化観光局1983 |
| 9 | 大宮通木津屋橋上る上之町416-2 | 立会 | 1983.4.28 | GL-0.3mにて江戸時代、-1.1mにて室町時代の包含層を検出。 | 『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和58年度京都市文化観光局1984 |
| 10 | 北小路通大宮西入御器屋町30他 | 発掘 | 1985.6.1～7.10 | 平安時代の井戸・溝、鎌倉時代の井戸、室町時代の井戸・溝などを検出。平安時代の土器類・木製品・銭貨、中世の土器類が出土。 | 『左京七条一坊十三町平安京東市外町の調査』平安学園考古学クラブ1986 |
| 11 | 和気町8 | 立会 | 1986.1.9 | GL-1.12m以下にて鎌倉時代の包含層を検出。 | 『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度京都市文化観光局1987 |
| 12 | 御器屋町地先 | 立会 | 1991.3.4～4.10 | 推定猪隅小路・七条大路の路面、平安時代の包含層を検出。 | 『京都市内遺跡立会調査概報』平成３年度京都市文化観光局1992 |
| 13 | 七条通大宮東入大工町122他 | 立会 | 1991.6.27・28 | GL-0.58m以下、鎌倉時代～室町時代の路面(推定七条大路)、平安時代後期の溝(推定七条大路南側溝)を検出。 | 『京都市内遺跡立会調査概報』平成３年度京都市文化観光局1992 |
| 14 | 大宮通・七条通～塩小路通 | 立会 | 1992.3.17～26 | 地表下0.56m以下、時期不明の包含層、路面を検出。 | 『京都市内遺跡立会調査概報』平成４年度京都市文化観光局1993 |
| 15 | 七条通大宮西入和気町9 | 立会 | 1992.4.13 | 地表下0.1m以下、時期不明の包含層を検出。 | 『京都市内遺跡立会調査概報』平成４年度京都市文化観光局1993 |
| 16 | 猪隅通木津屋橋上る樽屋町387 | 立会 | 1993.2.4・8 | 地表下0.55m以下、平安時代前期・後期の土坑、時期不明の路面を検出。 | 『京都市内遺跡立会調査概報』平成５年度京都市文化観光局1994 |
| 17 | 七条通大宮東入大工町106 | 立会 | 1993.5.19～24 | 地表下0.54m以下、平安時代後期・末期の包含層・土坑、平安時代末期～鎌倉時代の落込みを検出。 | 『京都市内遺跡立会調査概報』平成５年度京都市文化観光局1994 |
| 18 | 北小路通大宮西入御器屋町・花畑町他 | 発掘 | 1996.12.15～1997.1.14、5.14～18 | 表土下1.5mで近代の耕作土層を検出。平安時代～中世の土器類などが出土。 | 「平安京左京七条一坊十三・十四町の調査」『平安学園教育研究会研究論集41号』平安学園平安京跡遺跡調査委員会1998 |
| 19 | 諏訪開町5、5-2 | 発掘 | 2002.3.11～5.18 | 平安時代の柱穴、中世の土坑、平安時代～近世の井戸などを検出。平安時代～近世の土器類、瓦類、石製品などが出土。 | 「左京七条一坊十一町平安京東市周辺の調査」『平安学園教育研究会研究論集44号』平安学園考古学クラブ2003 |
| 20 | 和気町6 | 発掘 | 2003.2.12～3.28 | 平安時代の土坑・柱穴・井戸、鎌倉時代～室町時代の井戸・柱穴・土坑・溝などを検出。平安時代～室町時代の土器類・銭貨・石製品などが出土。 | 『平安京跡発掘調査報告左京八条一坊十六町』関西文化財調査会2004 |

# ３．遺　　構

## （１）基本層序（図５・６）

調査地の現地表面の標高は、26.1～26.2ｍと平坦である。層序は、現地表面以下、約0.4ｍまでが現代盛土、その下に0.2～0.4ｍの厚さで江戸時代の整地層がある。調査区の北部には、その下に江戸時代初頭の落込みや大型の土坑がある。その下層は暗灰黄色粘質土とオリーブ黒色砂礫の地山となる。調査区南西部には平安時代末期の整地層であるオリーブ褐色粘質土層が部分的に認められる。

調査では、江戸時代の整地層を除去した面（標高25.5 ｍ前後）で平安時代末期から桃山時代の遺構を検出した。これらの遺構を２時期に分け、まず第１期として鎌倉時代から桃山時代、第２期として平安時代末期から鎌倉時代初期のものを調査した。

地山面の標高は、地表面下0.6ｍ（標高25.5ｍ）と、平安京左京域としては比較的浅い深度である。

## （２）遺構の概要（表２）

調査で検出した遺構は総数312基である。第２期の遺構は、平安時代末期から鎌倉時代初めにかけての整地層・井戸・土坑などがある。第１期の遺構は、鎌倉時代の整地層・土坑・柱穴群・井戸・埋甕遺構、鎌倉時代末期から室町時代にかけての柱穴群・井戸・埋甕遺構、安土・桃山時代から江戸時代初期にかけての土坑・落込みがある。なお、江戸時代の遺構として南北に並ぶ杭跡や根石、土坑、石垣痕跡（東面する石垣の据え付け痕）、井戸（漆喰組井戸、瓦組井戸）などが多数認められたが、今回は調査の対象から外した。

以下、検出面ごとに主な遺構について述べる。なお、各検出遺構および出土遺物の時期の判定は、平安京・京都Ⅰ期からⅩⅣ期の編年案を準用する[3)]。

表２　遺構概要表

| 時　　代 | 遺　　構 | 備　　考 |
|---|---|---|
| 平安時代末期<br>～鎌倉時代初期 | 整地層247、土坑272、井戸262・263・305・311 | 第２期 |
| 鎌倉時代 | 整地層126、柱穴群(柱穴43・65・253など)、<br>土坑84・229・282・285、井戸291・312、埋甕遺構Ａ | 第１－３期 |
| 鎌倉時代<br>～室町時代初期 | 柱穴群、井戸87、埋甕遺構Ｂ・Ｃ | 第１－２期 |
| 安土・桃山時代<br>～江戸時代初期 | 土坑82、落込み165 | 第１－１期 |

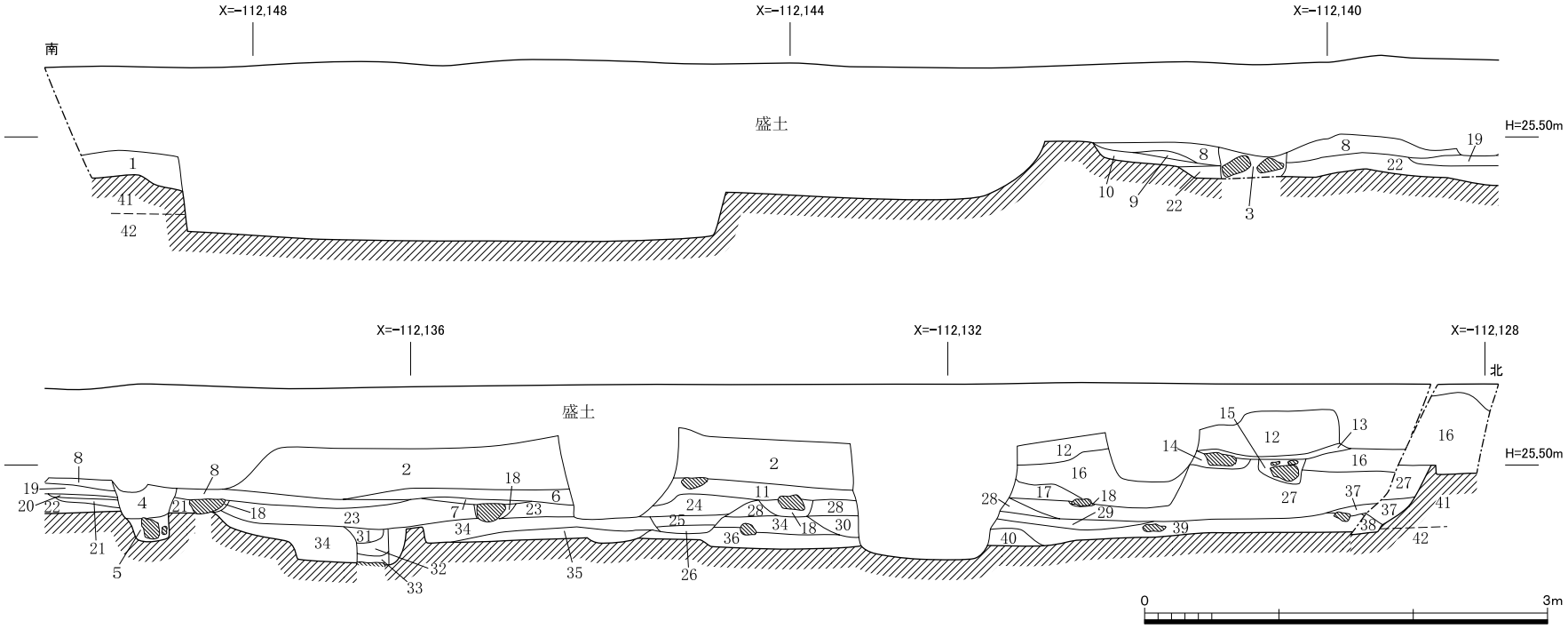



図5　調査区西壁断面図（1：50）

1　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥、粘質
2　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色泥砂、土師片少量混
3　10YR2/2 黒褐色泥砂
4　2.5Y3/1 黒褐色砂泥、炭少量混
5　2.5Y3/2 黒褐色砂泥
6　2.5Y3/2 黒褐色砂泥
7　5Y4/1 灰色砂泥
8　10YR3/2 黒褐色泥砂、φ2～3cm礫中量混
9　7.5YR3/2 黒褐色砂泥
10　10YR3/1 黒褐色砂泥
11　5Y3/2 黒褐色泥砂～シルト
12　10YR3/2 黒褐色砂泥
13　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥
14　2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥、土師片少量混
15　10YR4/2 灰黄褐色砂泥、土師片少量混
16　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥、土師片少量混
17　2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂
18　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粗砂
19　2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥、土器少量混
20　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥
21　5Y3/2 オリーブ黒色泥砂
22　2.5Y4/2 黒褐色砂泥、土器少量混
23　2.5Y4/1 黄灰色粗砂
24　2.5Y3/2 黒褐色砂泥、φ2～3cm礫・土師片少量混
25　2.5Y3/1 黒褐色粗砂
26　10YR4/2 灰黄褐色泥砂～シルト
27　2.5Y4/4 オリーブ褐色泥砂、土師片少量混
28　2.5Y3/2 黒褐色砂泥
29　2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂～シルト、土師片少量混
30　2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥～シルト、やや粘質
31　2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂
32　2.5Y4/1 黄灰色砂泥
33　5Y3/2 オリーブ黒色砂泥
34　5Y3/2 オリーブ黒色泥砂
35　2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂
36　2.5Y4/4 褐色砂泥、10YR4/2 灰黄褐色泥砂混
37　2.5Y3/2 黒褐色砂泥、φ3～4cm礫・土師片少量混
38　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥、土師片少量混
39　2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥+2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥、φ3～4cm礫少量混
40　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色泥砂、φ1～2cm礫中量混
41　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土（地山上層）
42　5Y3/2 オリーブ黒色砂礫（地山下層）

※ 1～18 江戸時代の整地層および遺構　　19～26 落込み165　　27～40 土坑285

## （3）第２期の検出遺構（図７、図版１）

第２期の遺構は、調査区南西部で整地層（整地層247)、中央部で土坑１基（土坑272)、東半を中心に井戸４基（井戸262・263・305・311）を検出した。

**整地層247**（図７） 整地層はほとんどが後世の遺構に削平されており、調査区南西部に残るのみであった。この層は平安時代末期の土器類の破片が混じるオリーブ褐色粘質土で、検出した範囲は東西約1.0ｍ南北約4.5ｍあり、厚さは約0.2ｍある。

**土坑272**（図７・８） 調査区中央部で検出した。平面形は東西2.2ｍ、南北2.5ｍの円形で深さは0.8ｍ、底部の標高は24.20ｍである。埋土は暗褐色粗砂を主体とする層で、間に細砂から微砂を挟む。内面に漆の付着した灰釉系陶器鉢の底部、高台内に墨書のある輸入白磁椀などが出土した。これらは京都Ⅵ期古段階（12世紀末期）に属する。

**井戸262**（図９、図版１） 調査区中央東側で検出した方形木枠井戸である。掘形は東西1.8ｍ、南北1.6ｍの隅丸方形を呈し、深さは約1.6ｍであった。井戸枠は腐朽して残存していなかったが、一辺0.9ｍの方形木枠の痕跡とその中央に水溜の曲物の痕跡を確認した。井戸底部の標高は23.9ｍである。埋土からは京都Ⅴ期新段階からⅥ期古段階（12世紀後半から末期）の土器類が出土した。

**井戸263**（図９、図版２） 井戸262の南で検出した、方形木枠井戸である。掘形は東西1.4ｍ、南北1.7ｍの隅丸方形を呈し、深さは約1.3ｍであった。井戸枠は腐朽して残存していなかったが、一辺0.7ｍの方形木枠の痕跡を確認した。井戸底部の標高は24.2ｍである。上層から

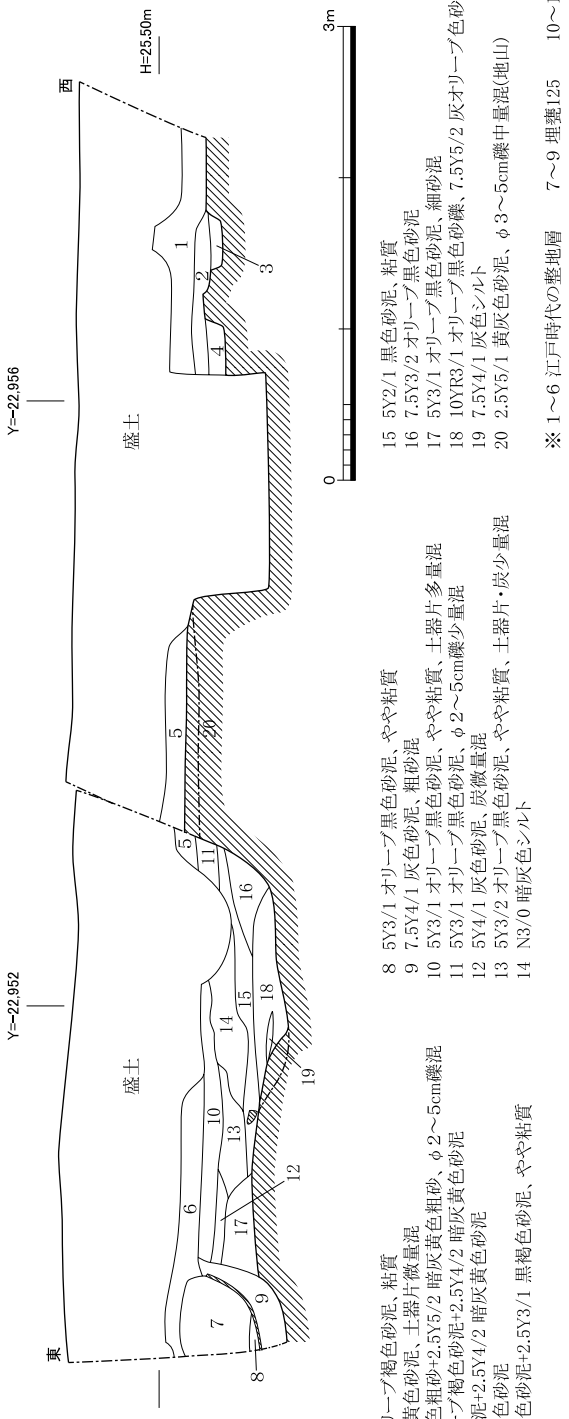



図６　調査区南壁断面図（１：50）

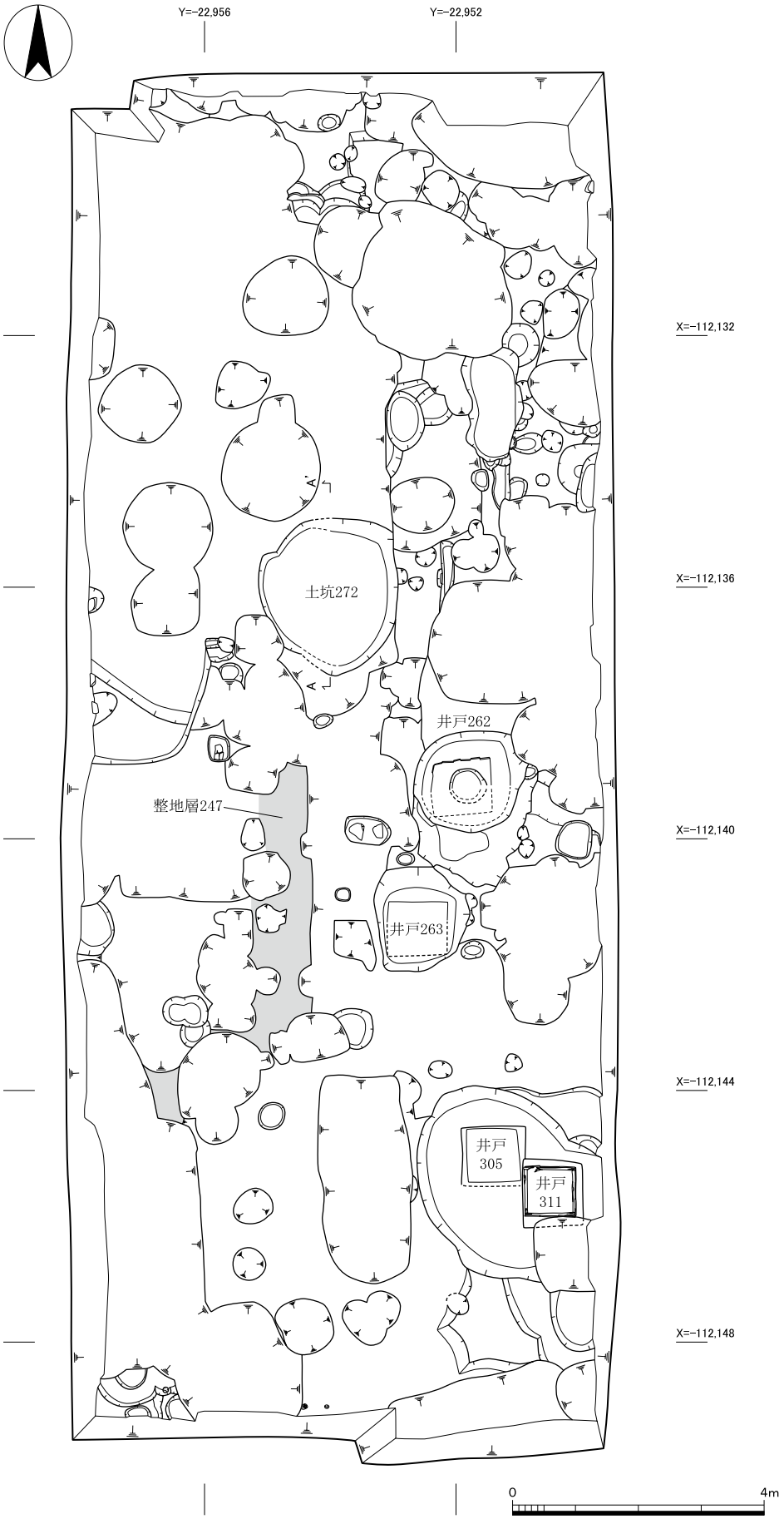
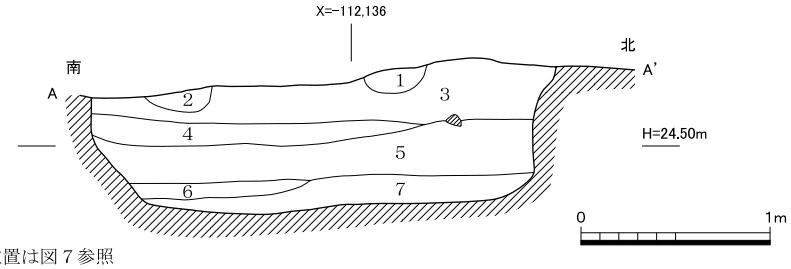


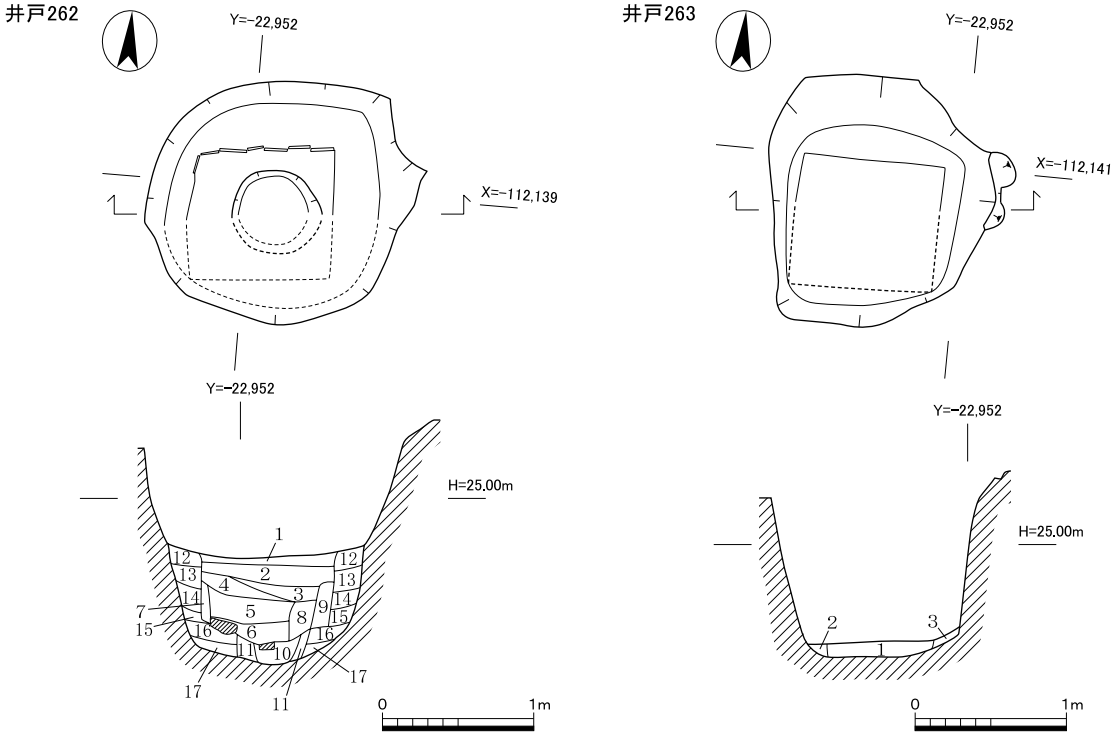

図７　第２期平面図（１：100）




※ 断面の位置は図７参照

1 7.5YR3/1 黒褐色粘土、φ３～10cm礫混
2 10YR3/3 暗褐色粗砂
3 10YR3/4 暗褐色粗砂、φ５～30cm礫混
4 10YR3/2 黒褐色粗砂、φ１～2cm礫混
5 10YR4/1 褐灰色細砂、φ３～10cm礫混
6 10YR3/3 暗褐色微砂、φ３～10cm礫多量・土器小片混
7 10YR3/4 暗褐色粗砂、φ３～5cm礫混

図８　土坑272断面図（１：40）



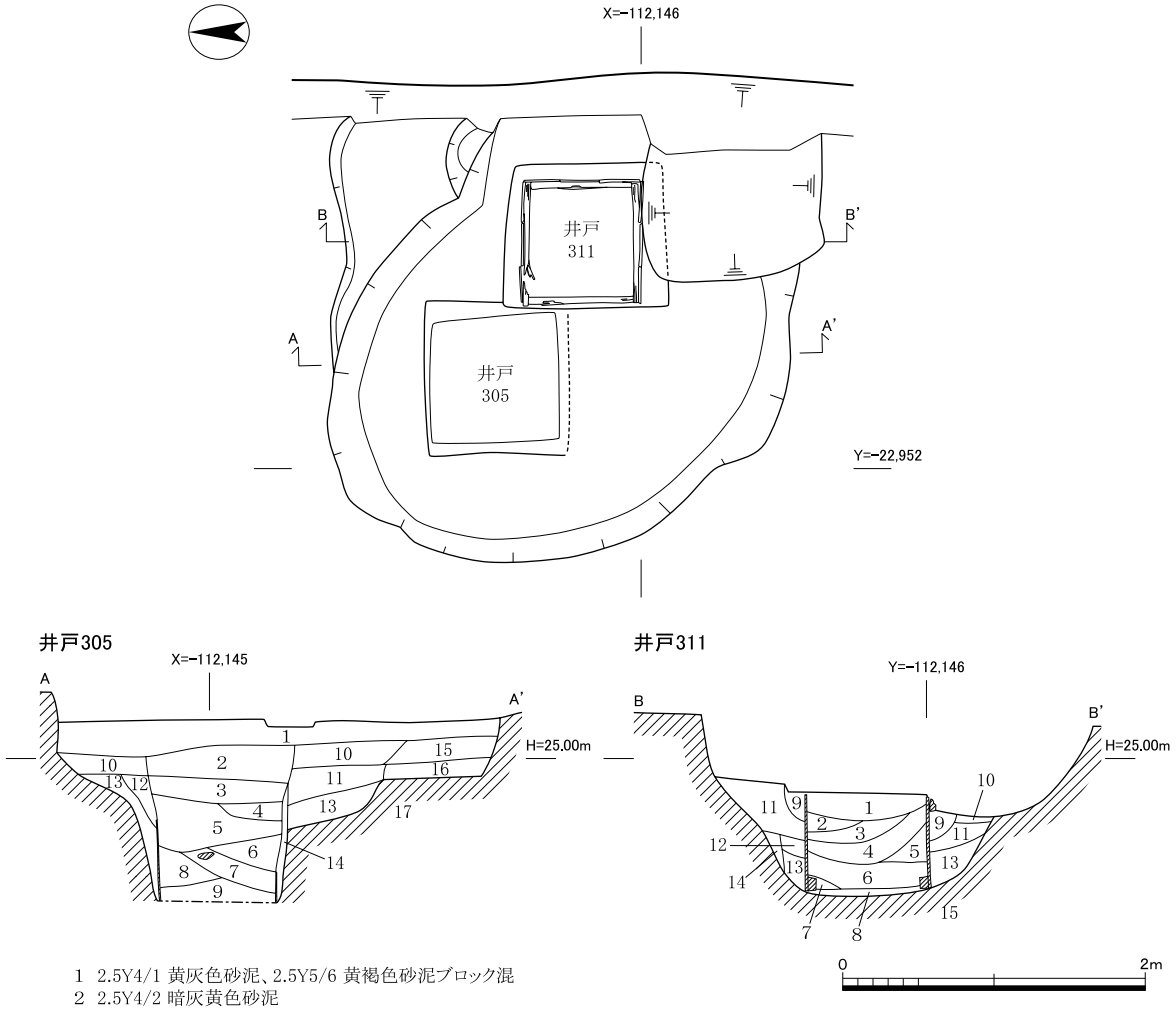

1 5Y4/3 暗オリーブ色微砂
2 5Y3/2 オリーブ黒色シルト
3 2.5Y3/1 黒褐色粗砂
4 2.5Y2/1 黒色シルト
5 2.5Y3/2 黒褐色細砂、φ３～5cm礫混
6 5Y2/2 オリーブ黒色細砂
7 2.5Y3/2 暗赤褐色粗砂
8 5Y3/2 オリーブ黒色シルト、φ２～3cm礫混
9 2.5Y4/1 黄灰色シルト
10 7.5Y2/1 黒色シルト
11 5Y2/2 オリーブ黒色微砂、φ3cm礫混
12 5Y4/1 灰色砂泥
13 5Y4/2 灰オリーブ色砂泥、やや粘質
14 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥、粗砂混
15 2.5Y4/1 黄灰色粗砂
16 2.Y4/1～4/3 黄灰色～オリーブ褐色粗砂
17 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粗砂

1 10YR2/1 黒色微砂
2 2.5Y2/1 黒色粘土
3 10YR4/4 褐色粗砂、φ0.5～3cm礫混

図９　井戸262・263実測図（１：50）

は京都Ⅴ期新段階からⅥ期古段階（12世紀後半から末期）の土器類が出土した。

**井戸305・311**（図10、図版１） 調査区南東部で検出した方形木枠井戸である。この二つの木枠は一部が互いに接しており造り替えがあったとみられる。掘形は上方では大きく一つとなっているが、下方で切りあいがあり、311が新しい。掘形は東西2.5ｍ以上、南北3.0ｍある。井戸305の深さは約1.4ｍ、底部の標高は24.0ｍ、井戸枠は、一辺0.8ｍの方形木枠で縦板は長さ約0.5ｍが残存していた。縦板横桟いずれも、材質はスギ材であった。井戸311の深さは約1.2ｍ、底部の標高は




1 2.5Y4/1 黄灰色砂泥、2.5Y5/6 黄褐色砂泥ブロック混
2 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥
3 2.5Y3/1 黒褐色砂泥
4 5Y3/1 オリーブ黒色砂泥、粘質
5 10YR4/1 褐灰色泥砂、φ5～10cm礫少量混
6 2.5Y4/1 黄灰色細砂
7 10YR3/1 黒褐色砂泥、粘質、細砂混
8 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、粘質
9 10YR2/2 黒褐色砂泥
10 10YR4/1 褐灰色砂泥
11 10YR3/3 黒褐色砂泥
12 7.5Y3/1 オリーブ黒色粘土
13 5Y3/2 オリーブ黒色砂泥、φ1～2cm礫多量混
14 10YR3/3 暗褐色粗砂～細砂
15 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥、細砂混
16 10YR3/2 黒褐色砂泥、φ2～5cm礫多量混
17 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂、φ2～5cm礫多量混(地山)

1 10YR3/1 黒褐色砂泥、やや粘質
2 2.5Y3/2 黒褐色砂泥、木片混
3 2.5Y3/1 黒褐色砂泥、粗砂混、やや粘質
4 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂
5 10YR4/1 褐灰色砂泥、やや粘質
6 5Y3/1 オリーブ黒色砂泥、粘質、土師片多量混
7 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥、粗砂混
8 2.5Y4/1～4/4 黄灰色～オリーブ褐色粗砂
9 7.5YR3/1 黒褐色砂泥
10 2.5Y5/4 黄褐色粗砂
11 2.5Y3/1 黒褐色砂泥、やや粘質
12 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥、粗砂混
13 2.5Y4/2 黒褐色砂泥
14 2.5Y5/1 黄灰色砂泥、やや粘質
15 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂、φ2～5cm礫多量混(地山)

図10　井戸305・311実測図（1：50）

24.1ｍであった。井戸枠は、一辺0.8ｍの方形木枠で縦板は長さ約0.6ｍが残存していた。縦板横桟いずれも、材質はスギ材であった。両井戸の埋土からは京都Ⅴ期新段階からⅥ期古段階（12世紀後半から末期）の土器類が出土した。

## （4）第1期の検出遺構（図11、図版2）

第1期の遺構は、柱穴群（柱穴43・65・253など）、土坑5基（土坑82・84・229・282・285）、井戸3基（井戸87・291・312）、他に整地層（整地層126）、埋甕遺構3箇所（埋甕遺構A・B・C）、落込み1基（落込み165）を検出した。

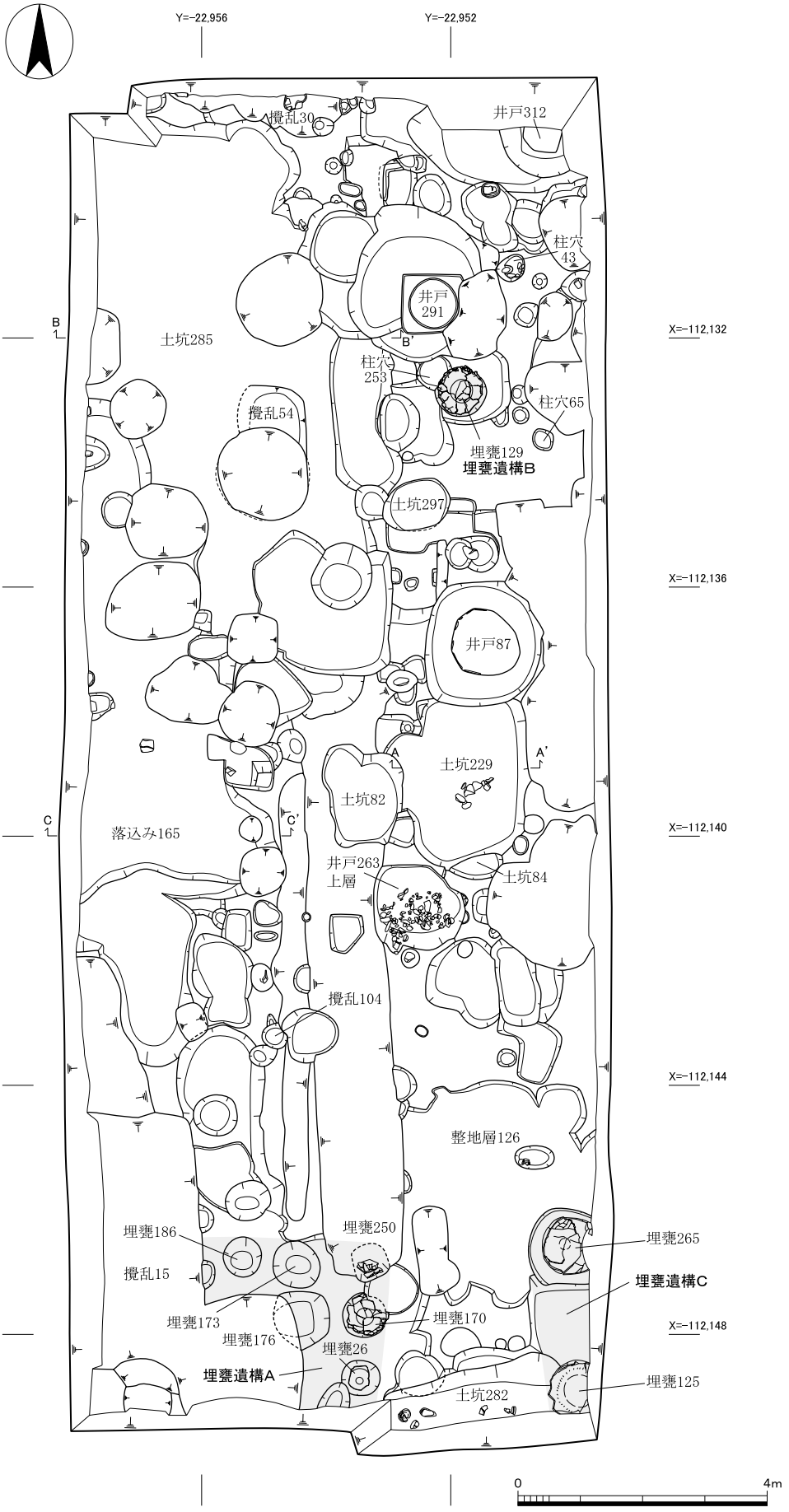


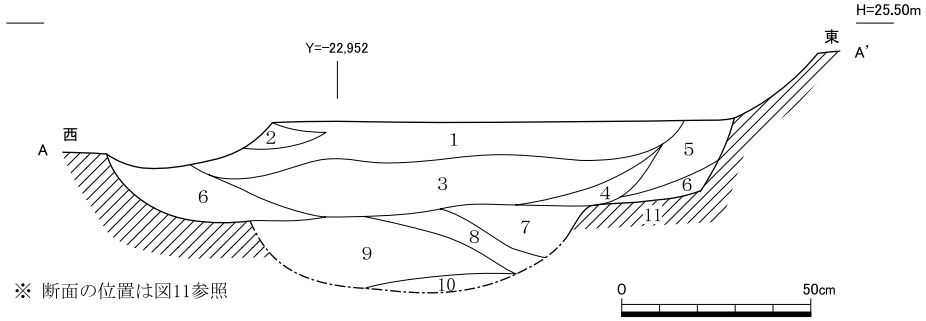

図11　第１期平面図（１：100）

**柱穴群**（図11） 調査区北東部で20数基の柱穴を検出した。直径0.3～0.5ｍの円形、深さ0.12～0.40ｍ、底部の標高は24.45～24.95ｍである。埋土は褐色系砂泥を中心とする層が堆積する。中には礎石の入るものがある。これらの柱穴群は後世の攪乱を多く受け、建物としてまとめることはできなかった。

**柱穴43**（図11） 北東部柱穴群の一つである。規模は、掘形は径0.45ｍの円形、深さ0.14ｍ、柱当りの径は0.15ｍで底面の標高は25.39ｍである。埋土は黒褐色砂泥で礫が入る。京都Ⅵ期新段階（13世紀中頃）の土師器皿が出土した。

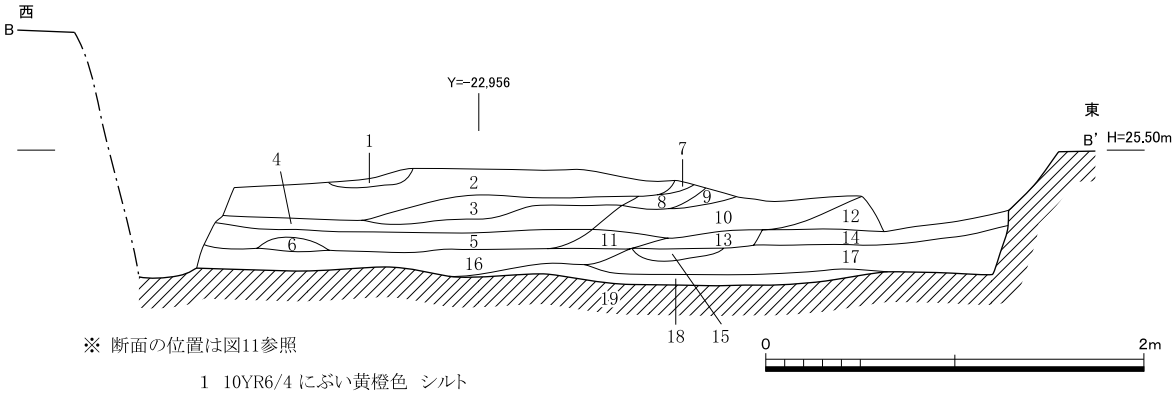
**柱穴65**（図11） 北東部柱穴群の一つである。規模は、掘形は径0.35ｍの円形、深さ0.16ｍ、底面の標高は25.42ｍである。埋土は黒褐色砂泥で、京都Ⅵ期新段階（13世紀中頃）の土器類が出土した。

**柱穴253**（図11） 北東部柱穴群の一つである。規模は、掘形は径0.60ｍ、深さ0.15ｍ、底面の




1 7.5YR3/3 暗褐色砂泥、土器小片・炭混
2 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土
3 7.5YR3/3 暗褐色砂泥、2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土ブロック・土器小片・炭混
4 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土、φ2～3cm礫・土器小片・炭混
5 10YR3/4 暗褐色砂泥、土器・焼土・炭多量混
6 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土、土器小片・炭混
7 2.5Y4/4 オリーブ褐色粘質土+10YR3/3 暗褐色砂泥混
8 10YR3/3 暗褐色砂泥、φ2～3cm礫多量混
9 5Y4/3 暗オリーブ褐色粘質土、φ2～3cm礫混
10 5Y2/2 オリーブ黒色砂泥、φ2～5cm礫多量混
11 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥、粘質（地山）

図12 土坑229断面図（１：20）




1 10YR6/4 にぶい黄橙色 シルト
2 10YR4/1 褐灰色細砂 土器破片少量含む
3 2.5Y5/1 黄灰色細砂
4 10YR4/3 にぶい黄灰色微砂 やや粘質
5 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト
6 2.5Y4/4 オリーブ褐色微砂 やや粘質
7 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂
8 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂 微量炭含む
9 2.5Y3/2 黒褐色細砂
10 2.5Y5/3 黄褐色細砂 礫混じる
11 2.5Y6/2 灰黄色粗砂 φ2～3㎝の礫混じる
12 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂 φ3～6㎝の礫混じる
13 2.5Y5/4 黄褐色細砂 φ3～5㎝の礫混じる
14 5Y6/3 オリーブ黄色シルト
15 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト
16 2.5Y3/2 黒褐色細砂 礫混じる
17 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色細砂 φ2～5㎝の礫混じる
18 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂
19 10YR3/1 黒褐色微砂 やや粘質（地山）

図13 土坑285断面図（１：40）

標高は25.25ｍである。埋土は暗褐色砂泥に炭が混じる層で、京都Ⅵ期新段階（13世紀中頃）の土師器皿が出土した。

**土坑82**（図11） 調査区南東隅部で検出した。東西1.3ｍ、南北1.7ｍの不定形の土坑である。深さは0.3ｍで、底部の標高は25.0ｍである。埋土は褐色砂泥を中心とする層で、京都Ⅺ期（16世紀末から17世紀前半）の施釉陶器（天目茶椀）が出土した。

**土坑84**（図11） 調査区中央部東寄りで検出した。東西1.0ｍの不定形の土坑である。深さは0.18ｍと比較的浅く、底部の標高は25.37ｍである。褐色砂泥を中心とする埋土からは京都Ⅵ期新段階からⅦ期古段階（13世紀中頃から後半）の土器類・石製品が出土した。

**土坑229**（図11・12） 調査区中央部東寄りで検出した。東西2.0ｍ以上、南北2.7ｍの隅丸方形の土坑である。深さは0.65ｍで比較的浅く、底部の標高は24.9ｍである。埋土からは京都Ⅵ期新段階からⅦ期古段階（13世紀中頃から後半）の土器類、漆製品、石製品、鉄滓が出土した。

**土坑282**（図6・11、図版３） 調査区南東隅部で検出した。東西3.1ｍ以上、南北0.8ｍ以上ある。深さは0.8ｍで、底部の標高は24.54ｍである。埋土は暗灰色シルトを中心とする層で、京都Ⅵ期中段階からⅦ期新段階（13世紀前半から14世紀前半）の土器類、石製品が出土した。

**土坑285**（図11・13） 調査区北西部で検出した。東西4.8ｍ以上、南北8.2ｍと大規模な長方形である。深さは0.5ｍで比較的浅く、底部の標高は25.0ｍである。東の肩はY=－22,953ｍラインで南北に直線的に伸びる。底部はオリーブ黒色砂礫層で掘り止められていることから地山層上面の

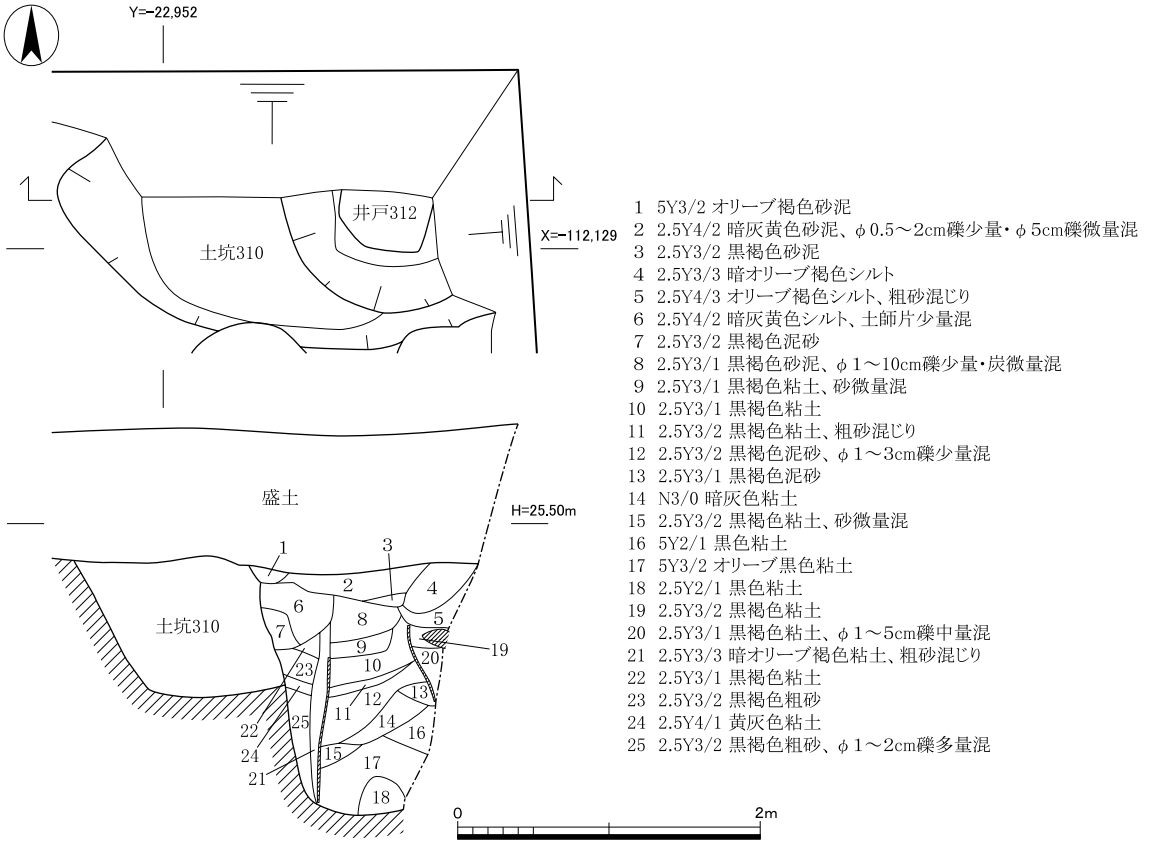


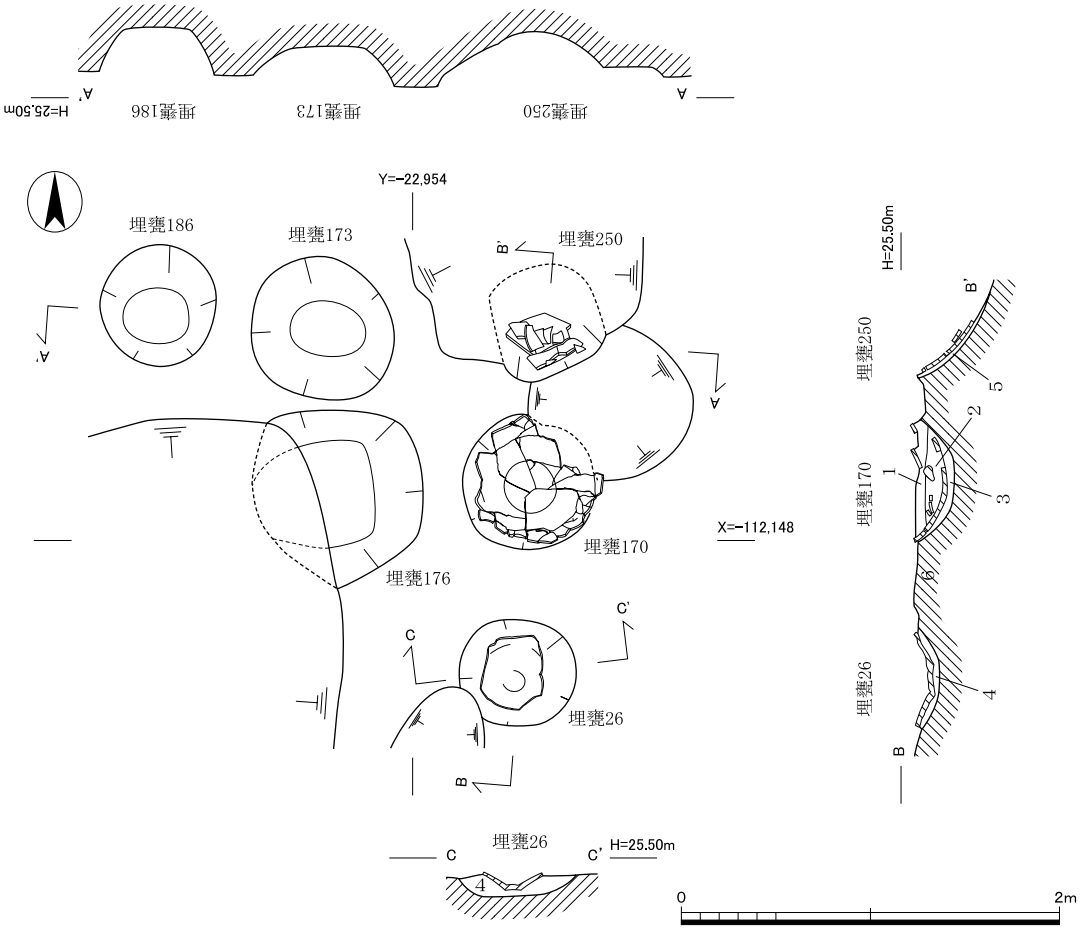

図14　井戸312実測図（１：50）

暗灰黄色粘質土を採取した土取り穴と考える。埋土からは京都Ⅵ期新段階からⅦ期古段階（13世紀中頃から後半）の土器類が出土した。

**井戸87**（図11） 調査区中央東寄りで検出した、木枠井戸である。掘形は東西1.9ｍ、南北2.0ｍの隅丸方形を呈する。井戸枠は一辺約0.3ｍの縦板で円形に組まれていた。腐朽が激しく、ホゾなどは確認できなかった。作業の安全対策上、掘り止めたため、底部の確認はできなかった。埋土からは京都Ⅵ期新段階からⅦ期新段階（13世紀中頃から14世紀前半）の土器類が出土した。

**井戸291**（図11） 調査区北東部で検出した、方形木枠井戸である。掘形は後世の井戸により攪乱され、正確には計測できなかったが、南北1.8ｍ以上である。深さは約1.3ｍであった。井戸枠は腐朽して残存していなかったが、一辺0.9ｍの方形木枠の痕跡とその中に径0.75ｍの水溜用曲物の痕跡を確認した。井戸底部の標高は23.8ｍである。埋土からは京都Ⅵ期中段階から新段階（13世紀前半）の土器類が出土した。

**井戸312**（図14、図版２） 調査区北東隅で検出した、木枠井戸である。南東部のみ検出した。掘形は東西1.0ｍ以上、南北0.8ｍ以上の円形を呈する。井戸枠は一辺約0.3ｍの縦板で多角形に組まれていた。深さは約1.6ｍであった。井戸底部の標高は23.6ｍである。縦板は0.9ｍの長さまで確



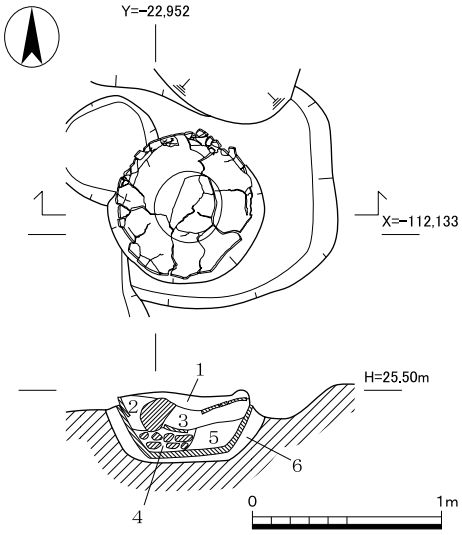

1 2.5Y3/1 黒褐色砂泥、5Y4/4 暗オリーブ色粘土ブロック混（埋甕170）
2 5Y3/1 オリーブ黒色砂泥、φ1～2cm礫中量・φ10cm礫微量混（埋甕170）
3 2.5Y3/2 黒褐色砂泥、φ1～3cm礫少量混（埋甕170）
4 2.5Y3/1 黒褐色砂泥（埋甕26）
5 2.5Y3/2 黒褐色砂泥、φ0.5～1cm礫微量混（埋甕250）
6 5Y4/4 暗オリーブ褐色砂泥、φ3～10cm礫多量混（地山）

図15 埋甕遺構Ａ（埋甕26・170・173・176・186・250）実測図（１：40）

認できたが、腐朽が激しく、ホゾなどは確認できなかった。埋土からは京都Ⅵ期古段階からⅦ期古段階（12世紀末期から13世紀後半）の土器類が出土した。

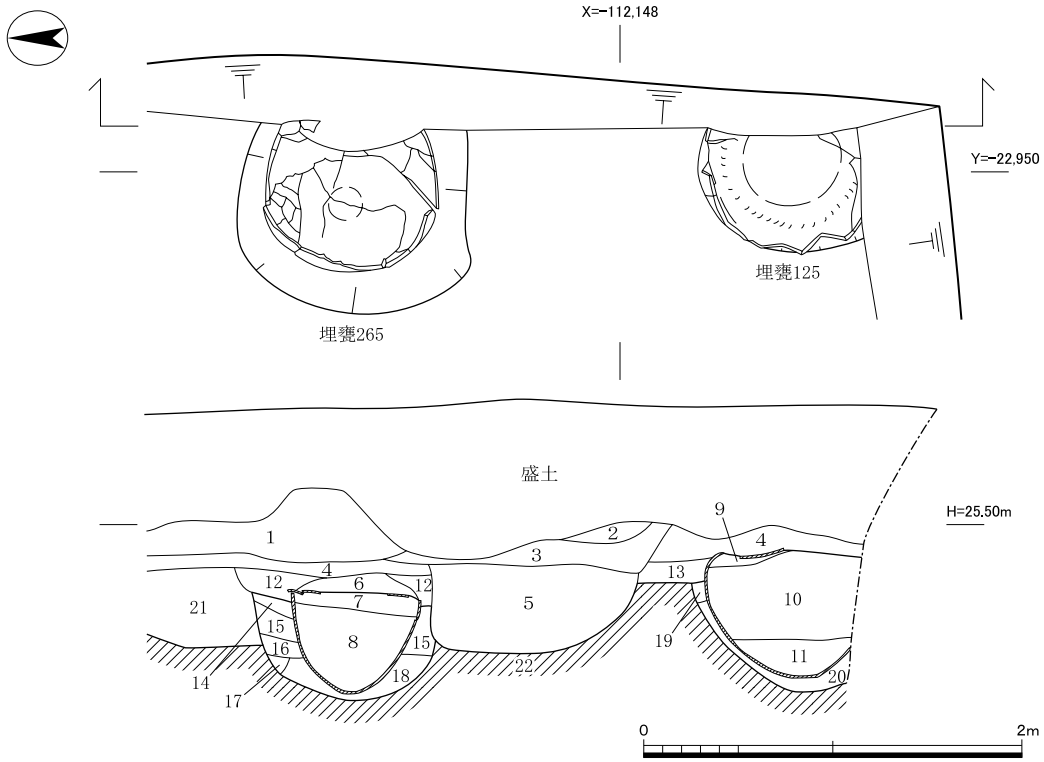
**整地層126**（図11） 調査区南東部で検出した。この層は焼土・炭・土器・石製品の小片を多く含むオリーブ黒色砂泥層で、井戸305・311を覆う。西側は後世の攪乱で削平される。規模は、東西3.1ｍ以上、南北3.5ｍで厚さは約0.1ｍある。上面の標高は25.5ｍ前後である。土器類は京都Ⅵ期新段階からⅦ期古段階（13世紀中頃から後半）のものである。

**埋甕遺構A**（図15、図版３） 調査区南西部で検出した埋甕群である。埋甕186・173・250・176・170・26で構成される。南西部は後世に攪乱を受け削平されていたが、甕据付穴が東西３列以上、南北３列以




1 2.5Y3/2 黒褐色砂泥、φ1～5cm礫微量混
2 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥、φ0.5～1cm礫少量混
3 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥、φ1～4cm礫中量混
4 2.5Y3/2 黒褐色砂泥、φ3～8cm礫多量混
5 2.5Y3/1 黒褐色砂泥、φ4～5cm礫・炭微量混
6 2.5Y3/1 黒褐色砂泥、5Y4/3 暗オリーブ色砂泥ブロック少量・炭中量混

図16 埋甕遺構B（埋甕129）実測図（１：40）




1 5Y3/1 オリーブ黒色砂泥、φ0.5～2cm礫少量・炭微量混
2 5Y3/2 オリーブ黒色砂泥、炭微量混
3 5Y2/2 オリーブ黒色砂泥、φ3～6cm礫微量混
4 10YR4/1 褐灰色砂泥
5 7.5Y2/1 黒色砂泥、φ1～4cm礫微量・鉄分中量混
6 2.5Y3/1 黒褐色砂泥
7 10YR4/1 褐灰色砂泥～10YR3/1 黒褐色砂泥
8 N3/0 暗灰色砂泥、やや粘質、土器少量混 （埋甕265）
9 10YR3/1 黒褐色砂泥
10 10YR4/1 褐灰色砂泥+2.5Y3/1 黒褐色砂泥、やや粘質 （埋甕125）
11 5Y3/1 オリーブ黒色砂泥、やや粘質
12 5Y3/2 オリーブ黒色砂泥、φ1～4cm礫少量混
13 5Y3/1 オリーブ黒色粗砂、φ0.5～1cm礫中量混
14 7.5Y3/2 オリーブ黒色砂泥
15 5Y4/1 灰色シルト
16 7.5Y2/2 オリーブ黒色細砂+5Y3/2 オリーブ黒色細砂
17 7.5Y3/1 オリーブ黒色粗砂
18 5Y3/2 オリーブ黒色粗砂、粘質、φ1～4cm礫混 （埋甕265掘形）
19 5Y3/2 オリーブ黒色粗砂、φ0.5～1.5cm礫中量混
20 7.5Y4/1 灰色砂泥、粗砂混 （埋甕125掘形）
21 7.5Y3/2 オリーブ黒色砂泥
22 2.5Y5/1 黄灰色砂泥、φ3～5cm礫中量混（地山）

図17 埋甕遺構C（埋甕125・265）実測図（１：40）

図18　埋甕125大甕出土状況（北西から）

上、整然と並ぶ。南北列の東から１列目（埋甕26・170・250）には甕の底部が残存する。その他の据付穴では甕は抜き取られていた。埋甕26は常滑大甕、埋甕170・250は須恵質の陶器で美作の勝間田焼の可能性がある。抜き取り穴はいずれも円形で、直径は0.6～0.8ｍ、深さ0.12～0.25ｍ、掘形底部の標高は25.0～25.3ｍである。埋甕の間隔は東西・南北列とも底部心々で約1.0ｍの等間隔である。埋甕170の破片と共に出土した土器は京都Ⅶ期中段階（14世紀初期）に属し、この頃に廃絶したものとみられる。

**埋甕遺構Ｂ**（図16、図版３） 調査区北東部で検出した単独の埋甕遺構である。備前産大甕が約0.35ｍの深さで残存し据えられていた。掘形は0.85ｍ、深さは0.4ｍ、掘形底部の標高は25.1ｍである。大甕内部には甕の口縁部が落ち込んでいた。

**埋甕遺構Ｃ**（図17・18、図版３） 調査区南東隅部で検出した埋甕群である。埋甕125・265で構成される。両遺構とも常滑産大甕が約0.7ｍの深さで残存し据わっていた。大甕内上部には甕の口縁部が落ち込んでいた。掘形はいずれも円形で、直径は1.2ｍ、深さ0.75ｍ、掘形底部の標高は埋甕125が24.60ｍ、埋甕265が24.53ｍである。両埋甕の間隔は底部心々で2.4ｍの間隔である。この遺構は調査区南東壁際で検出したため、さらに南東へ拡張する可能性がある。

**落込み165**（図11・19） 調査区西部で検出した不定形の落ち込みである。西側は調査区外へ延長するとみられる。東西３ｍ以上、南北約８ｍ、底面はほぼ平坦で深さは約0.2ｍである。底面の標高は北で25.14ｍ、南で25.2ｍである。埋土は黒褐色砂泥を中心とする層が堆積する。埋土中から京都Ⅺ期（16世紀末期から17世紀前半）の土師器鉢、17世紀初頭の施釉陶器（唐津茶椀）などが出土した。

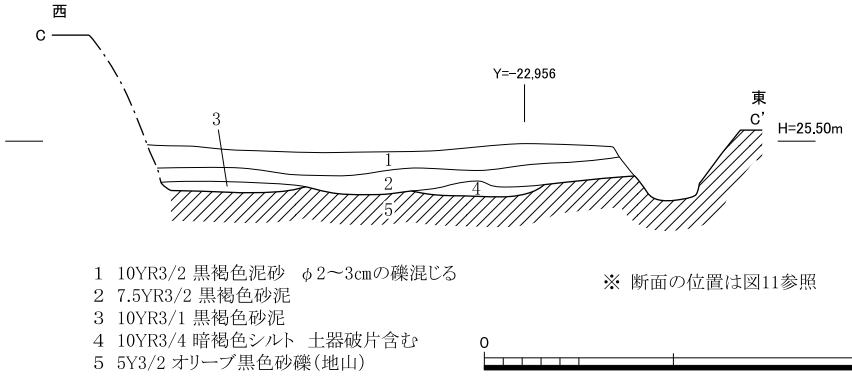



図19　落込み165断面図（１：40）

# ４．遺　　物

## （１）遺物の概要

今回の調査では整理用コンテナにして56箱の遺物が出土した。出土遺物には、土器類・瓦類・漆製品・銭貨・石製品などの種類がある。出土遺物の約９割は土器類が占め、その他の種類の遺物は少ない。

時期は、弥生時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代のものがある。出土量が最も多いのは鎌倉時代から室町時代初期に属する遺物である。

土器類および石鍋については、遺構ごとにまとめて記述した。土器類・石鍋以外の出土遺物については、種類ごとに記述した。

調査では、遺構相互の重複が激しいため、新しい時期の遺構埋土・遺物包含層に、より古い時代の遺物が混入することが多くみられた。

個々の遺物の詳細については、巻末の遺物観察表（表５～７）に掲載した。

## （２）土器類（表５）

今回の調査で出土した最も古い遺物は弥生時代の甕である。極小片のため、図示できなかったが、外面に櫛描き文がある。井戸262埋土に混入していた。

以下は遺構ごとにまとめる。

**土坑272**(図20－１～３、図21)　平安時代末期から鎌倉時代初期の土師器、瓦器、輸入陶磁器、焼締陶器などが出土した。京都Ⅵ期古段階に属する資料である。

表３　遺物概要表

| 時　代 | 内　　容 | コンテナ箱数 | Ａランク点数 | Ｂランク箱数 | Ｃランク箱数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 弥生時代 | 弥生土器 | | | 少量 | ０箱 |
| 奈良時代 | 瓦 | | 瓦１点 | ０箱 | ０箱 |
| 平安時代後期～鎌倉時代初期 | 土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、灰釉系陶器、瓦器、輸入陶磁器、焼締陶器、瓦、銭貨、石製品 | | 土師器37点、灰釉系陶器２点、瓦器６点、輸入磁器３点、瓦２点、銭貨３点 | ０箱 | ５箱 |
| 鎌倉時代～室町時代初期 | 土師器、須恵器、灰釉系陶器、瓦器、輸入陶磁器、須恵質陶器、焼締陶器、瓦、漆製品、銭貨、石製品 | | 土師器62点、灰釉系陶器１点、瓦器６点、輸入陶磁器10点、須恵質陶器２点、焼締陶器６点、瓦２点、漆製品１点、銭貨２点、石製品６点 | １箱 | 28箱 |
| 安土・桃山時代～江戸時代初期 | 土師器、焼締陶器、施釉陶器、銭貨、金属製品、石製品 | | 土師器１点、施釉陶器２点、銭貨１点 | ０箱 | ５箱 |
| 合　計 | | 56箱 | 156点（17箱） | １箱 | 38箱 |

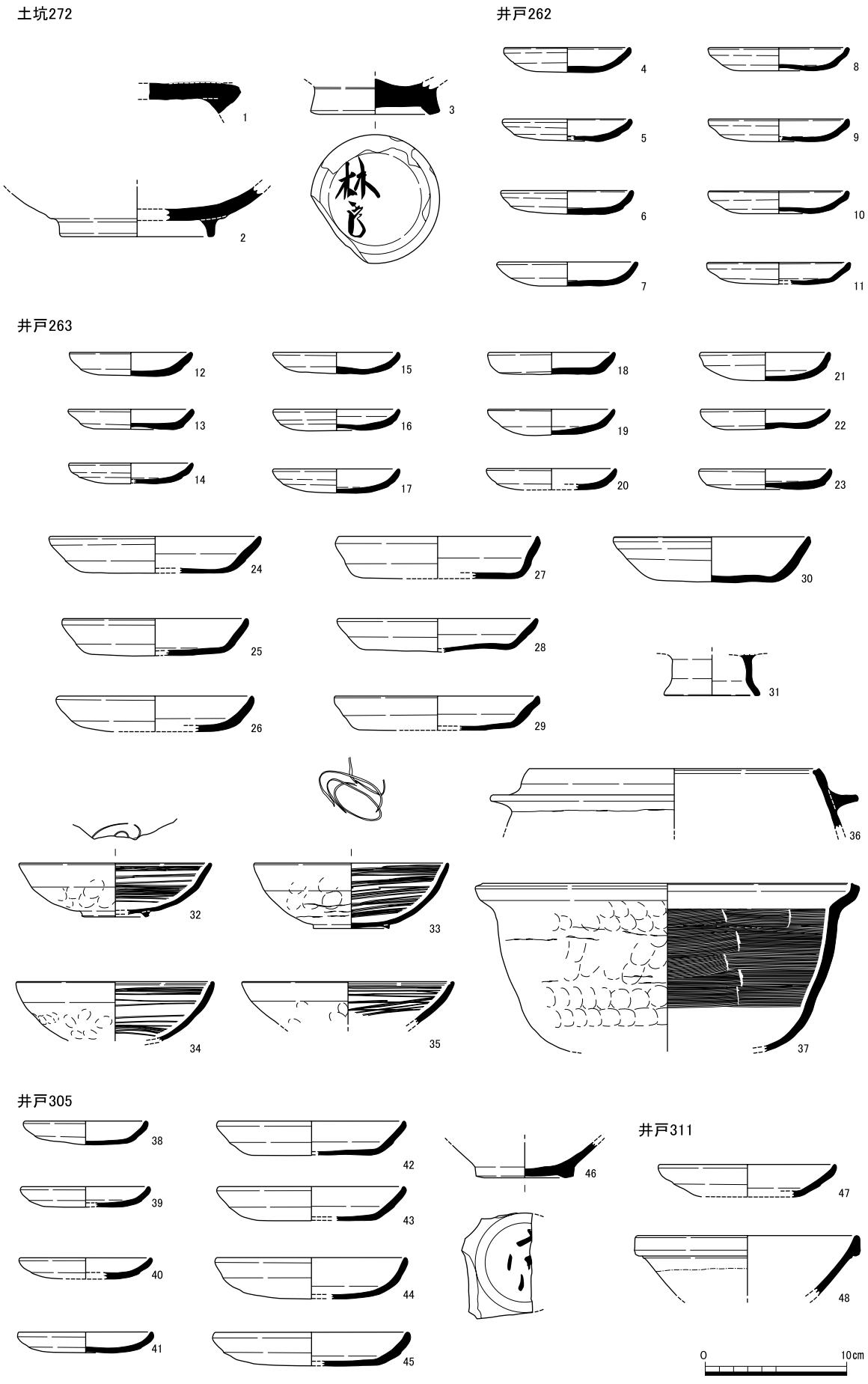



図20　出土土器類実測図１（１：４）

１・２は灰釉系陶器の鉢である。いずれも底部で内面全面に黒色の漆が付着する。３は輸入陶磁器の白磁椀である。器壁の厚い椀の底部である。削り出しの高台内に「林所（ヵ）」の墨書がある。

図21　輸入白磁椀３高台内赤外線写真

**井戸262**（図20－４～11、図版４）　平安時代末期から鎌倉時代初期の土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、輸入陶磁器などが出土した。京都Ⅴ期新段階からⅥ期古段階に属する資料である。

４～11は土師器の小型皿である。口径は8.8～9.9㎝の間である。５・６・10は体部が内湾して開く。それ以外は体部が直線的に開く。いずれも底部・体部外面はオサエ、底部内面はナデ、体部内面・口縁部内外面はヨコナデ調整である。

**井戸263**（図20－12～37、図版４）　平安時代末期から鎌倉時代初期の土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦器、輸入陶磁器、焼締陶器などが上層から出土した。京都Ⅴ期新段階からⅥ期古段階に属する資料である。

12～23は土師器の小型皿である。口径は8.6～9.1㎝の間である。13・18・19・23は体部が直線的に開く。それ以外は体部が内湾して開く。いずれも底部・体部外面はオサエ、底部内面はナデ、体部内面・口縁部内外面はヨコナデ調整である。口縁部外面のヨコナデが顕著なものがほとんどである。24～29は土師器の大型皿である。口径は12.8～14.3㎝の間である。いずれも体部は直線的に開き口縁端部は立ち上がる。24の口縁部外面は２段ナデである。30は土師器の白色系大型皿である。口径は13.7㎝ある。体部はやや屈曲した開き、口縁端部は立ち上がる。底部・体部外面オサエ、底部内面ナデ、体部内面・口縁部内外面ヨコナデ調整である。口縁部外面ヨコナデが２段である。31は土師器の台付き皿の台部で、皿部との接合面で剥離している。残存高は2.9㎝である。32～37は瓦器である。32～35は椀で、いずれも、緩やかに内湾する体部で口縁端部はやや尖り気味に丸く収める。32・33は逆三角形に簡略化された低い高台が貼り付けられる。体部外面はヘラミガキを行わず、オサエである。口縁部外面はヨコナデ、内面にはヘラミガキを施す。32は内面底部に輪状の暗文を施す。33は底部内面に連続長楕円形の暗文を施す。34・35は口縁端部内面にはヘラ状工具による沈線が１条めぐる。いずれも樟葉型Ⅲ期－１に分類され[4)]、12世紀後半から13世紀前半に位置づけられる。36は羽釜である。体部は内湾し、鍔を貼り付ける。37は鍋である。口縁部は屈曲して開き、端部は角張る。体部外面はオサエ、内面はナデ後ヨコハケ、口縁部内外面はヨコナデ調整である。

**井戸305**（図20－38～46、図22、図版４）　平安時代末期から鎌倉時代初期の土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、輸入陶磁器、焼締陶器などが出土した。京都Ⅴ期新段階からⅥ期古段階に属する資料である。

38～41は土師器の小型皿である。口径は8.6～9.4㎝の間である。いずれも底部は平坦、体部は内湾気味に開く。40は口縁部外面のヨコナデが顕著である。42～45は土師器の大型皿である。口

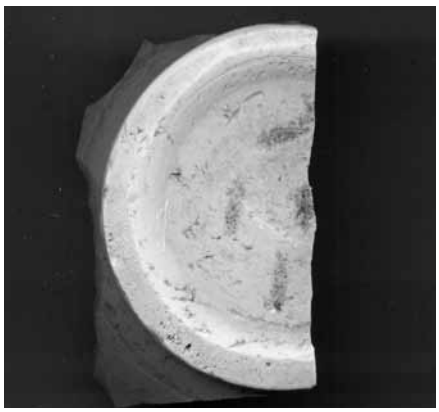


図22　輸入白磁椀46高台内赤外線写真

径は13.0～13.6㎝である。いずれも底部は平坦、体部は直線的に開く。口縁端部は立ち上がり三角形状を呈する。45は口縁部外面のヨコナデが顕著である。46は輸入陶磁器の白磁椀である。削り出しの高台内に墨書があるが、欠損のため解読不能である。

**井戸311**（図20－47～48、図版４）　平安時代末期から鎌倉時代初期の土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、輸入陶磁器、焼締陶器、石鍋などが出土した。京都Ⅴ期新段階からⅥ期古段階に属する資料である。

47は土師器大型皿である。復元口径は12.4㎝、口縁部外面のヨコナデが顕著である。48は輸入陶磁器の白磁椀である。体部は直線的に開き、口縁端部は肥厚して玉縁となる。体部外面下半は露胎である。

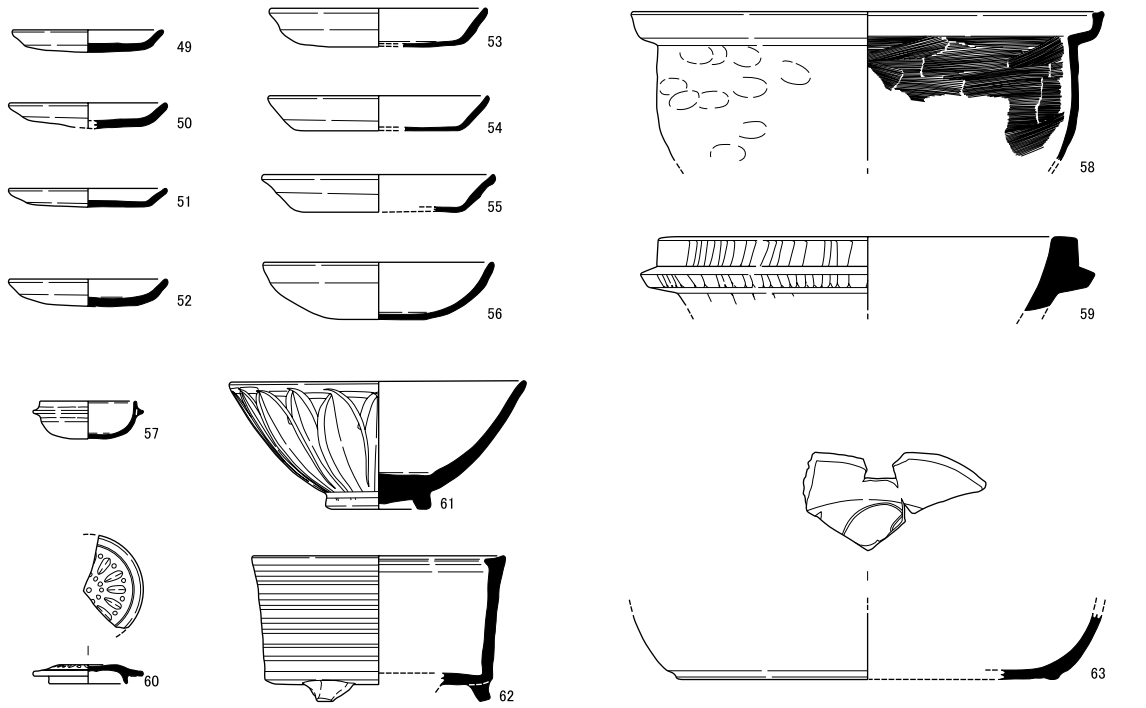
**土坑229**（図23－49～63、図版４）　鎌倉時代の土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、輸入陶磁器、焼締陶器などが出土した。他には、漆製品、石製品、鉄滓などが出土した。京都Ⅵ期新段階からⅦ期古段階に属する資料である。緑釉陶器・灰釉陶器などは極小片のため図示できなかった。

49～52は土師器の小型皿である。口径は8.0～8.3㎝である。いずれも底部・体部外面はオサエ、底部内面はナデ、体部内面・口縁部内外面はヨコナデ調整である。52には内外面ともに煤が付着する。53～55は土師器の大型皿である。口径は11.3～12.1㎝である。いずれも体部は底部からやや屈曲して直線的に立ち上がる。56は白色系大型皿である。口径12.1㎝で、底部は平坦で体部は内湾して開く。57は土師器のミニチュア羽釜である。口径5.0㎝、器高2.0㎝で、鍔を貼り付ける。58は瓦器の鍋である。口縁部は屈曲して立ち上がり、受け口状である。体部外面はオサエ後ナデ、体部内面ナデ後ヨコハケ調整。59は滑石製の鍋である。復元口径は21.9㎝で、内面は浅黄色、外面は煤が付き黒色を呈する。削り出された鍔は小さく断面は台形である。外面には縦方向のケズリ痕が残る。Ⅲ－ｂ類に分類される[5)]とみられ、13世紀に位置付けされる。60～63は輸入陶磁器である。60は青白磁の小壷の蓋である。摘みは付かない。外面に明緑灰色の釉を施すほか、内面天井部にも薄く釉を施す。外面は型による陽刻文様。華南産と考えられる。61は龍泉窯系の青磁椀である。体部外面には片切り彫りの手法で鎬蓮弁文を施す。高台内部以外に明オリーブ灰色の釉を施す。高台端部は釉を掻き取り、一部茶色に発色する。62は龍泉窯系の青磁香炉である。外面には削り出しで突帯を８条つくり、縞状に巡らせる。脚が付く。現存部には内外面ともに明緑灰色の釉を施す。63は陶器鉢である。低い高台が付く。胎土は灰白色、高台内部以外には緑色の釉を施す。底部内面には線刻を施す。華南産と考えられる。

**土坑282**（図23－64～84、図版５）　鎌倉時代後期から末期の土師器、灰釉陶器、瓦器、輸入陶磁器、焼締陶器などが出土した。京都Ⅵ期中段階からⅦ期新段階に属する資料である。

64～71は土師器の小型皿である。口径は7.8～8.6㎝である。いずれも底部・体部外面はオサエ

土坑229




土坑282

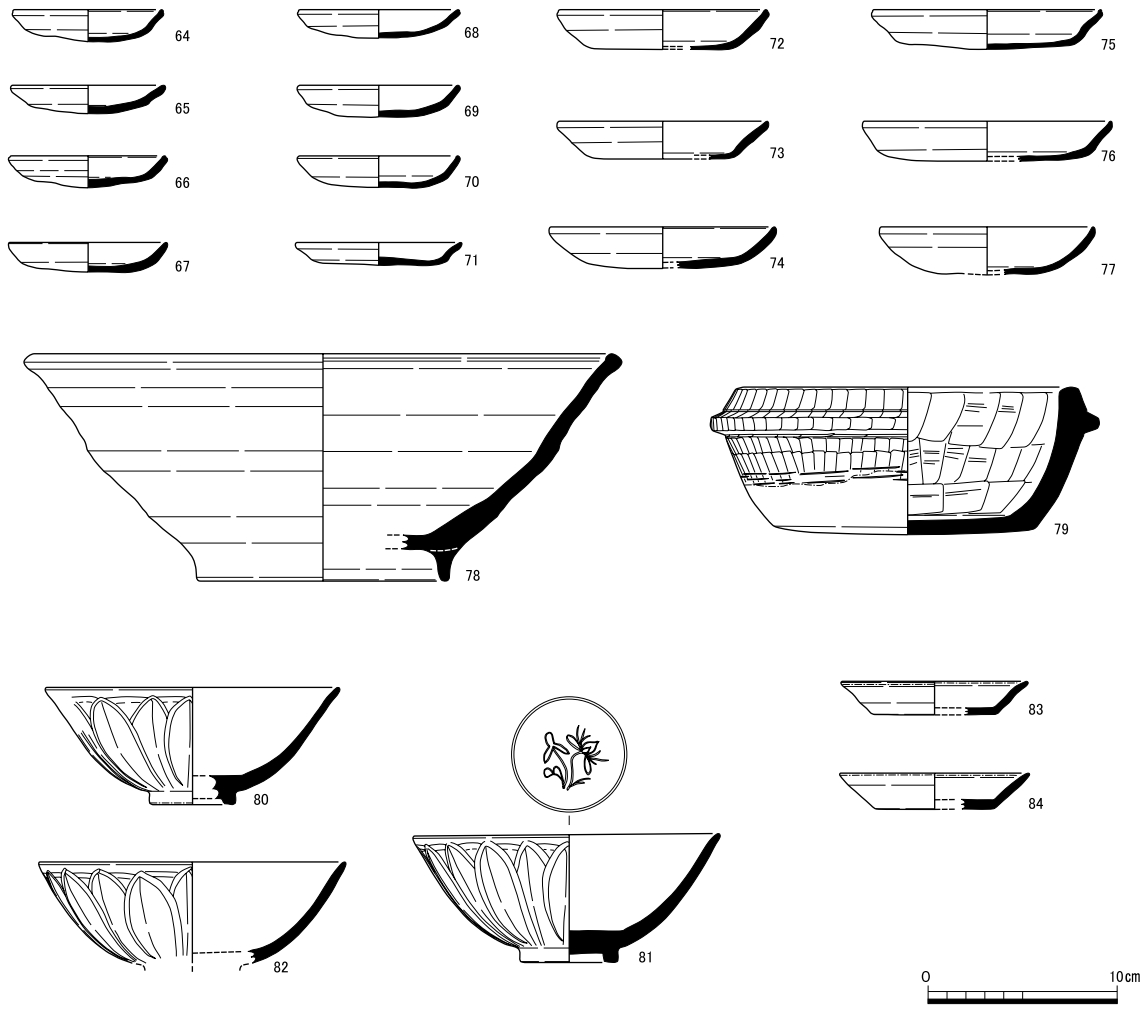



図23　出土土器類実測図２（１：４）

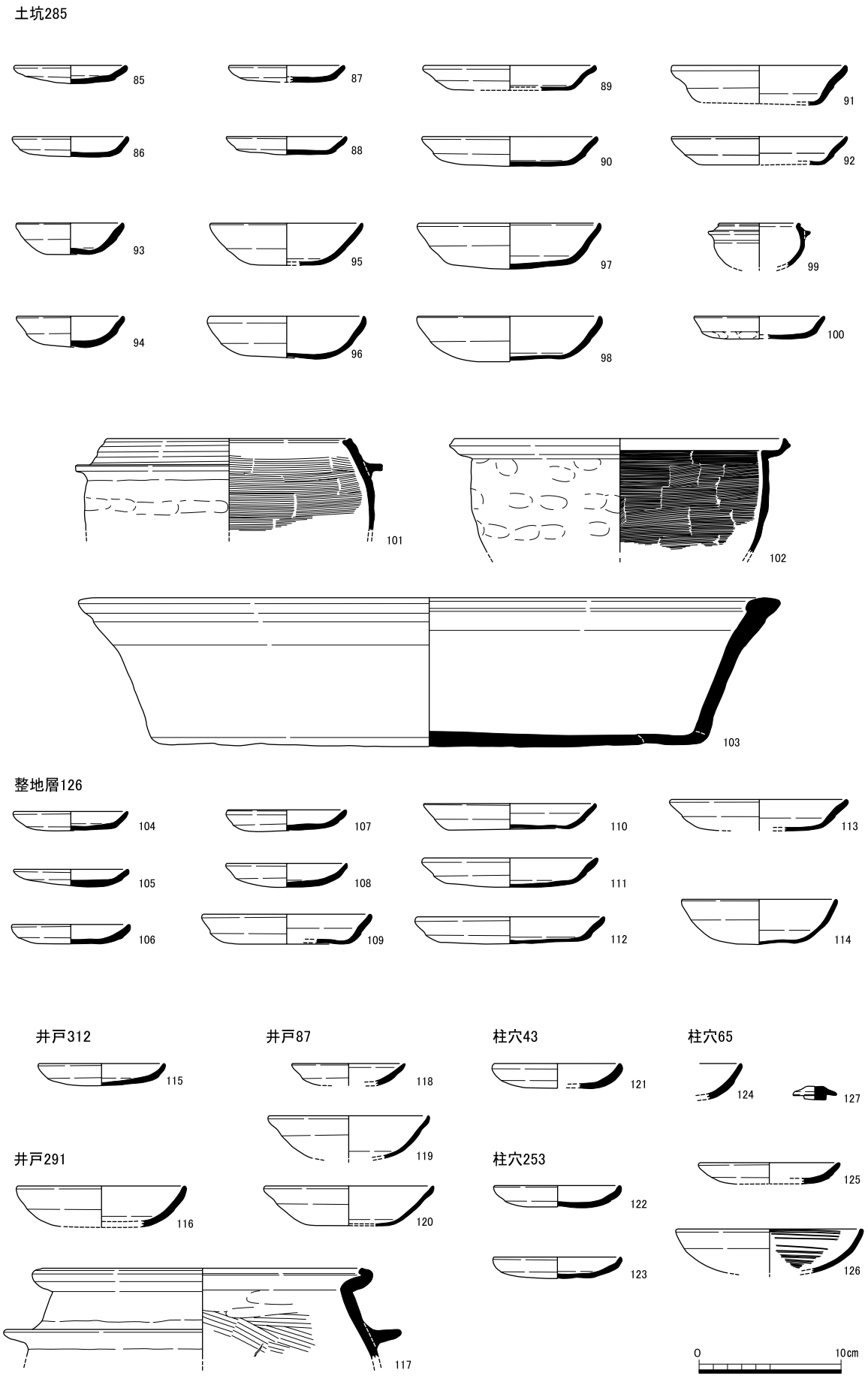



図24　出土土器類実測図３（１：４）

後ナデ、底部内面はナデ、体部内面・口縁部内外面はヨコナデ調整である。71はⅦ期中段階に属し、それ以外はⅦ期古段階に属する。72～76は土師器の大型皿である。口径は10.9～13.1㎝である。いずれも口縁部外面のヨコナデは１段である。77は白色系大型皿である。口径11.2㎝で、底部は平坦で体部は内湾して開く。78は灰釉系陶器の鉢である。復元口径は30.6㎝と大型である。器壁は1.0～1.7㎝と厚い。高台は貼り付け高台。外面にはケズリ痕が残る。79は滑石製の鍋である。ほぼ完形で出土した。口径17.3㎝、器高7.8㎝、底径13.7㎝と口径より底径が小さい。内面は灰色、外面は煤が付き黒色を呈する。削り出された鍔は小さく断面は正台形である。内外面に縦方向のケズリ痕が残る。外面下方は煤が厚く付着し、調整は不明である。Ⅲ－ａ－２類に分類され[6]、12～13世紀に位置付けられる。80～84は輸入陶磁器である。80～82は龍泉窯系の青磁椀である。体部外面には片切り彫りの手法で鎬蓮弁文を施す。80は二次被熱を受け、表面がざらつく。釉は灰オリーブ色を呈する。81は底部内面に陰刻で草花文を施す。Ⅰ－５ｃ類に分類され[7]、13世紀中頃から14世紀初頭に位置付けられる。高台内部以外に明灰オリーブ色の釉を施す。高台端部は釉を掻き取り、一部茶色に発色する。82は灰オリーブ色の釉を施す。底部は欠損のため不明。83・84は白磁皿で２点とも口禿である。

**土坑285**（図24－85～103、図版５） 鎌倉時代の土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、焼締陶器などが出土した。京都Ⅵ期新段階からⅦ期古段階に属する資料である。

85～88は土師器の小型皿である。口径は7.8～8.4㎝である。いずれも底部無調整、底部内面ナデ、体部内面・口縁部内外面はヨコナデ調整である。口縁部外面のヨコナデは一段で顕著である。89～92は土師器の大型皿である。口径は12.0～12.3㎝である。いずれも体部は外反して開き、口縁部外面のヨコナデは一段で顕著である。93～94は白色系小型皿である。口径は7.4㎝と7.5㎝。底部はやや凹み、体部は内湾して開く深い器形である。95～98は白色系大型皿である。口径は10.6～12.8㎝である。深い器形で口縁端部は立ち上がる。99は土師器のミニチュア羽釜である。口径5.6㎝、で、鍔を貼り付ける。体部は丸みが大きい。100～103は瓦器である。100は皿で、口径は9.2㎝。内外面ともヘラミガキは施さない。101は羽釜で、口径は17.0㎝ある。器壁は薄く、体部は大きく内湾し、口縁部外面は段成形する。102は鍋で、口径は47.2㎝ある。口縁部は屈曲して立ち上がり、受け口状である。体部外面はオサエ、体部内面ナデ後ヨコハケ。外面下半には煤が付着する。103は瓦質の火鉢である。口径47.2㎝、器高10.5㎝、底径38.0㎝あり、にぶい褐色を呈し一部に煤が付着する。型作りで底部外面は未調整でもみ殻痕が全面に付く。脚は付かない。樟葉産で13世紀後半に属する[8]。

**整地層126**（図24－104～114、図版６） 鎌倉時代の土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、焼締陶器などが出土した。京都Ⅵ期新段階からⅦ期古段階に属する資料である。

104～108は土師器の小型皿である。口径は8.0～8.4㎝である。いずれも口縁部外面のヨコナデは一段で顕著である。109～113は土師器の大型皿である。口径は11.7～12.3㎝である。いずれも体部は外反して開き、口縁部外面のヨコナデは一段で顕著である。114は白色系大型皿である。口径は10.9㎝。深い器形で底部にはやや凹凸がある。

**井戸312**（図24－115、図版６） 鎌倉時代の土師器、須恵器、輸入陶磁器、焼締陶器などが出土した。京都Ⅵ期古段階からⅦ期古段階に属する資料である。小片が多く、図示できる資料は１点にとどまる。

115は土師器の小型皿である。口径は8.8㎝である。

**井戸291**（図24－116～117、図版６） 鎌倉時代の土師器、輸入陶磁器が出土した。京都Ⅵ期中段階から新段階に属する資料である。

116は土師器の白色系大型皿である。口径は11.8㎝である。117は土師器の羽釜である。褐灰色を呈し、口縁部は屈曲、口縁端部は内側に屈曲する。鍔を貼り付ける。

**井戸87**（図24－118～120） 鎌倉時代後期から末期の土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、焼締陶器が出土した。京都Ⅵ期新段階からⅦ期新段階に属する資料である。

118は土師器の小型皿である。口径は7.8㎝である。119・120は土師器の白色系大型皿である。口径は11.2㎝と11.9㎝である。器壁は薄い。

**柱穴43**（図24－121） 鎌倉時代の土師器、瓦器、輸入陶磁器が出土した。京都Ⅵ期新段階に属する資料である。小片が多く、図示できる資料は１点にとどまる。

121は小型皿である。口径は9.0㎝。体部は内湾して開く。

**柱穴253**（図24－122～123、図版６） 鎌倉時代の土師器、焼締陶器が出土した。京都Ⅵ期新

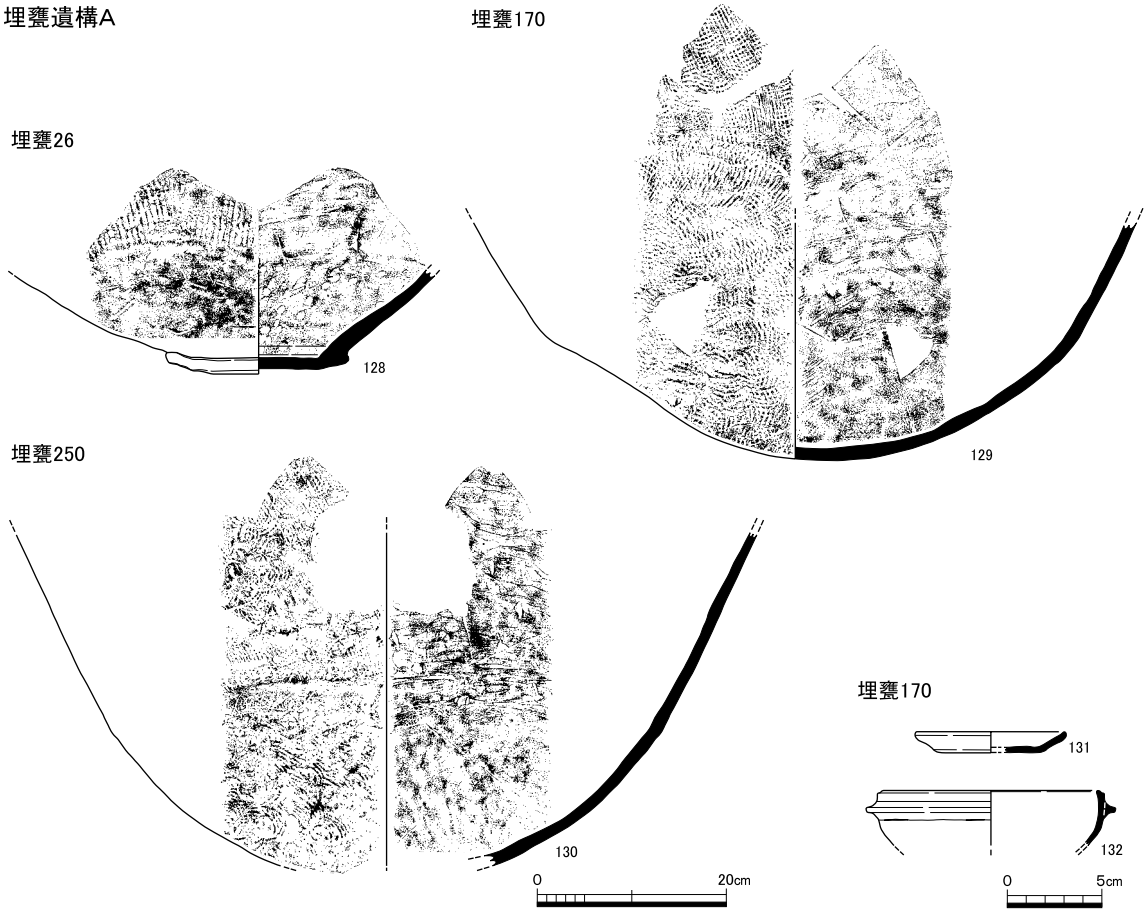



図25　出土土器類実測図４（１：８、131・132のみ１：４）

段階に属する資料である。小片が多く、図示できる資料は土師器２点にとどまる。

122・123は小型皿で口径は8.8㎝と8.9㎝である。いずれも底部にはやや凹凸があり、口縁端部は立ち上がる。

**柱穴65**（図24－124～127、図版６） 鎌倉時代の土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器が出土した。京都Ⅵ期新段階に属する資料である。

124・125は土師器皿である。124は小片のため口径は測定できなかった。125は9.8㎝である。口縁部外面のヨコナデは一段で顕著である。126は瓦器椀である。体部外面はヘラミガキを行わず、オサエ、口縁部外面はヨコナデ調整。内面にはヘラミガキを施す。樟葉型Ⅲ－３期に分類でき[9)]、13世紀中頃に位置付けられる。127は輸入白磁の壷蓋である。摘みはなく、底部は糸切りのままで平坦である。上面に灰白色の釉を施す。

**埋甕遺構Ａ**（図25－128～132、図版８） この遺構では、埋甕26・170・250で大甕128・129・130が据えられた状態で出土した。上半部については、後世の整地時に削平されており、全体を復元することはできなかった。埋甕群埋土からは、鎌倉時代末期の土師器、瓦器、輸入陶磁器が出土した。京都Ⅶ期中から新段階に属する。128は埋甕26から出土した甕の底部である。内外面ともに褐灰色を呈する。底部は丸底で歪みがある。底部外面は無調整。底部内面はナデ調整するが連続した指頭圧痕が残る。底部と体部の境界には粘土接合痕が残る。体部外面は底部近くではナデ、上方は縦方向の平行線タタキ文様がある。古期の常滑産である。

129は埋甕170から出土した須恵質の陶器甕の底部である。内外面とも灰色を呈する。底部は丸底。底部内面は丁寧なナデでタタキ痕を擦り消すが、底部と体部の境界には粘土接合痕が巡る。外面は底部からタタキ調整を施す。タタキには同心円模様の叩き具と平行模様の叩き具を組み合わせて使用している。12世紀後半に属する美作の勝間田焼の可能性がある。

130は埋甕250から出土した須恵質の陶器甕の底部である。内外面ともに灰色を呈する。底部は丸底。底部内面は丁寧なナデを施すが同心円の当て具の跡が残る。体部内面はケズリ、ケズリ面の上に当て具の跡が残る。内外面ともに底部と体部の

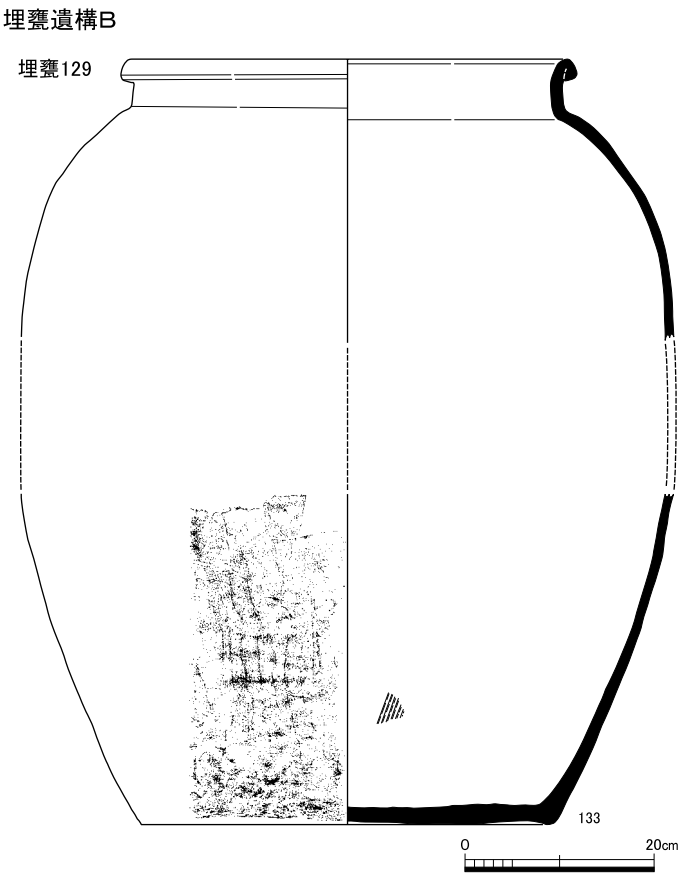


図26　出土土器類実測図５（１：８）

埋甕遺構C

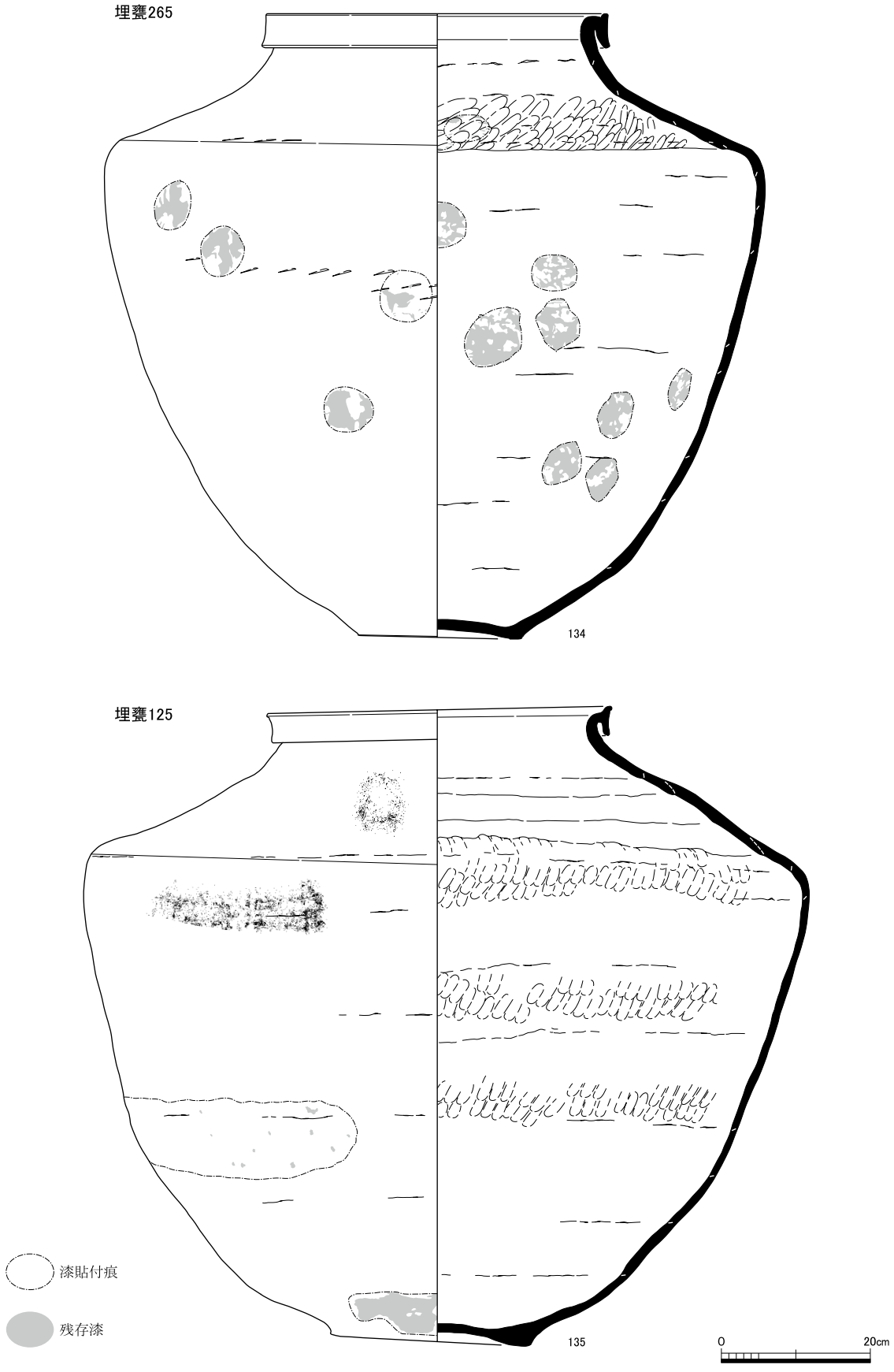



図27　出土土器類実測図６（１：８）

境界に粘土接合痕が巡る。外面は底部からタタキ調整を施す。タタキには平行模様と渦巻き模様および幾何学模様の３種の当て具を組み合わせて使用している。12世紀後半に属する美作の勝間田焼の可能性がある。131・132は埋甕170から出土した土師器である。131は小型皿、132は灰白色を呈するミニチュア羽釜である。両方ともⅦ期中段階に属し、廃絶時期を示すと考えられる。

**埋甕遺構Ｂ**（図26－133、図版８） この遺構では、埋甕129で備前産大甕133が据えられた状態で出土した。上半部は据え付けられた下半部に落ち込んでいたが、上半部と下半部は接合できなかった。口径46.0㎝、胴部最大径は69.0㎝、底部径42.8㎝で、無釉。肩部はナデ肩で底部は平坦。内外面とも褐灰色を呈する。口縁部は肥厚した端部が外側に巻き込む。内外面とも口縁部は丁寧な横ナデ、肩部以下、内面はナデ調整、外面はタタキ後タテナデ調整。底部には陶器の破片が焼成時に付着している。上部に欠損する箇所が多いこと、体部に蜘蛛の巣状の割れがあることから、故意に破壊された可能性も否めない。容量は約200ℓである。14世紀に属するとみられる。

**埋甕遺構Ｃ**（図27－134～135、図28・29、図版７・８） この遺構では、埋甕265と125で常滑産大甕134・135が据えられた状態で出土した。両方とも口縁部までほぼ残存しており全体を接合することができた。134は埋甕265から出土した。口径45.2㎝、肩部径88.6㎝、底部径21.9㎝、高さ83.9㎝。肩部が張った器形で肩部外面には自然釉がかかる。口縁端部は下方向に垂下し、下端は頸部に密着するように折れ曲がる箇所もある。縁帯幅は5.0㎝と広い。外面はナデ調整。タタキ痕は上胴部に巡るのは確認できるが、肩部は厚く釉がかかり不明である。内面の口縁部は丁寧な横ナデ、肩部以下はナデ調整。内面の肩部と体部の境界には接合時のユビオサエの痕が残る。底部外面は無調整、内面はオサエで成形した後ナデ調整。内外面の対応する位置に径６～８㎝の円形に漆を施す。断面に漆の浸み込みが観察することができた。外面には漆で布を貼り付ける箇所もある。焼成時に石はぜのあった箇所などが水漏れするようで、内外面から漆を付着させ、漏れを止める処置をしていると考える。この漏れ止め漆は肩部上方から頸部にかけても分布し、合計29箇所でこの処置が行われている。容量は約280ℓである。常滑編年では８期（14世紀後半）に属する[10)]。

135は埋甕125から出土した。口径46.0㎝、肩部径97.0㎝、底部径27.0㎝、高さ85.9㎝。肩部が張った器形で外面には自然釉がかかる。口縁端部は上・下方向に均等に拡張する。縁帯幅は4.0㎝。

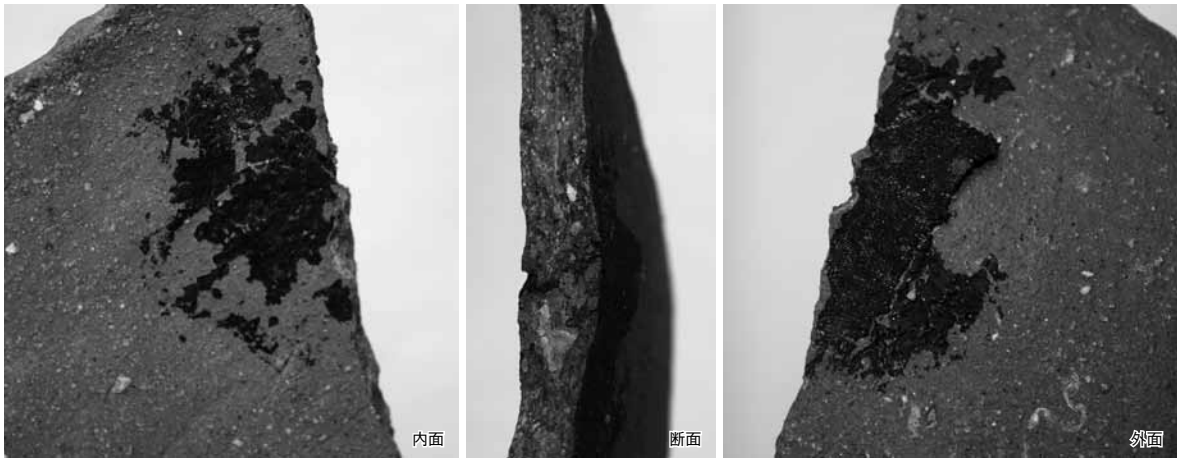


図28　大甕134　内外面に漆を施した部分

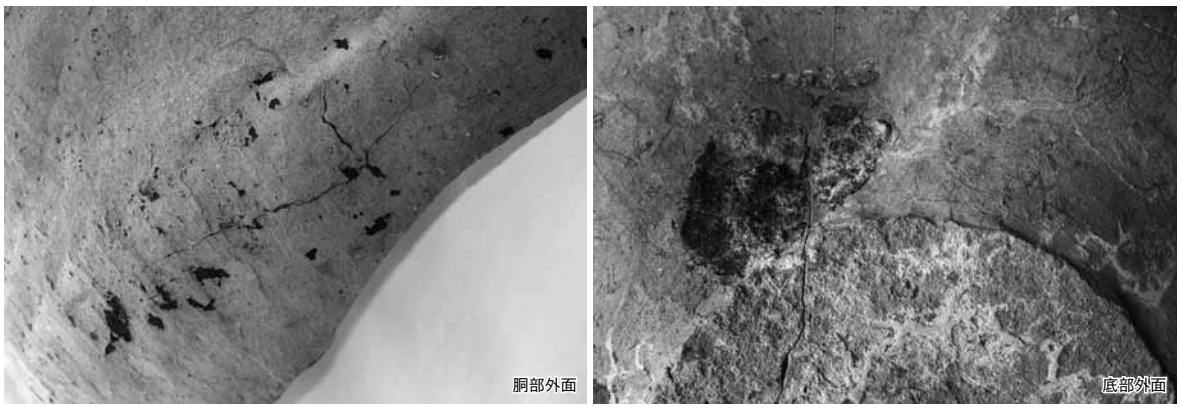



図29　大甕135ひび割れ部に漆を施した痕跡

外面は板状工具で縦方向にナデ調整。肩部には線刻がある。またタタキ文様が肩部と上胴部に２段巡る。内面は口縁部に丁寧な横ナデ、肩部以下は粗雑なナデ調整。肩部と口縁部の境界には粘土接合痕が明瞭に残る。胴部には粘土接合時のユビオサエの痕が３条巡る。底部はオサエで成形した後、ナデ調整。底部外面は無調整。焼成時のひび割れから水漏れしたようで、底部と胴部下半の一部に、内外面から漆を施し、漏れを止めている。容量は約360ℓである。常滑編年では７～８期（14世紀）に属する。ひび割れ箇所に漆を施した大甕は、京都市内では山科本願寺跡で出土例[11]がある。

**土坑82**（図30－136、図版６）　安土・桃山時代から江戸時代初期の土師器・瓦器・輸入陶磁器・施釉陶器・焼締陶器などが出土した。京都Ⅺ期に属する資料である。小片が多く、図示できる資料は施釉陶器１点にとどまる。

136は施釉陶器の瀬戸美濃産天目茶椀で内面全面および体部外面上半分まで黒褐色の釉を施す。腰部から直線的に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。底部は削り出し高台。大窯期（16世紀後半）に属する。

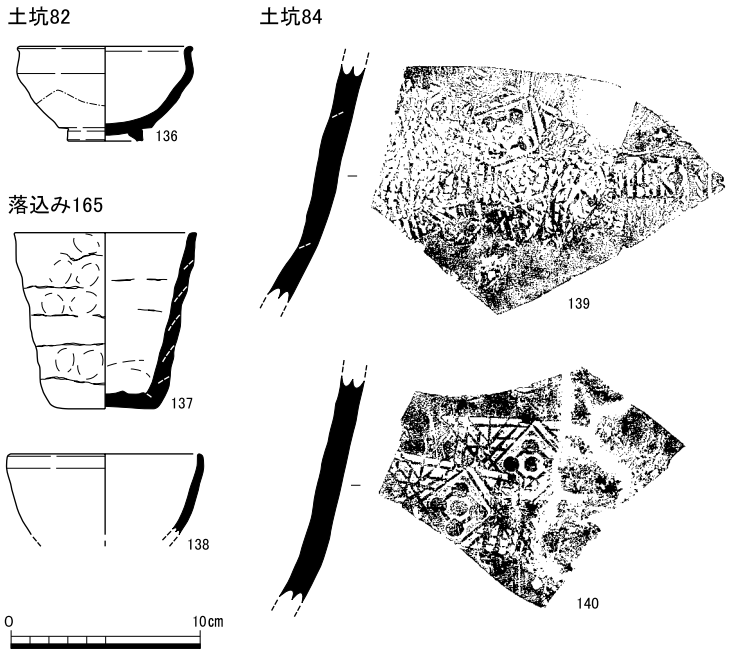



図30　出土土器類実測図７（１：４）

**落込み165**（図30－137・138、図版６）　安土・桃山時代から江戸時代初期の土師器・施釉陶器が出土した。京都Ⅺ期に属する資料である。その他に鎌倉時代後期の土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器が出土した。

137は土師器鉢である。内外面に粘土紐巻上げ痕や指頭圧痕が明瞭に残る。17世紀初頭に属する。138は施釉陶器唐津産椀である。底部は欠損のため不明であるが、残存部の内外面全面に灰オリーブ色の釉を施す。17世紀初頭に属する。

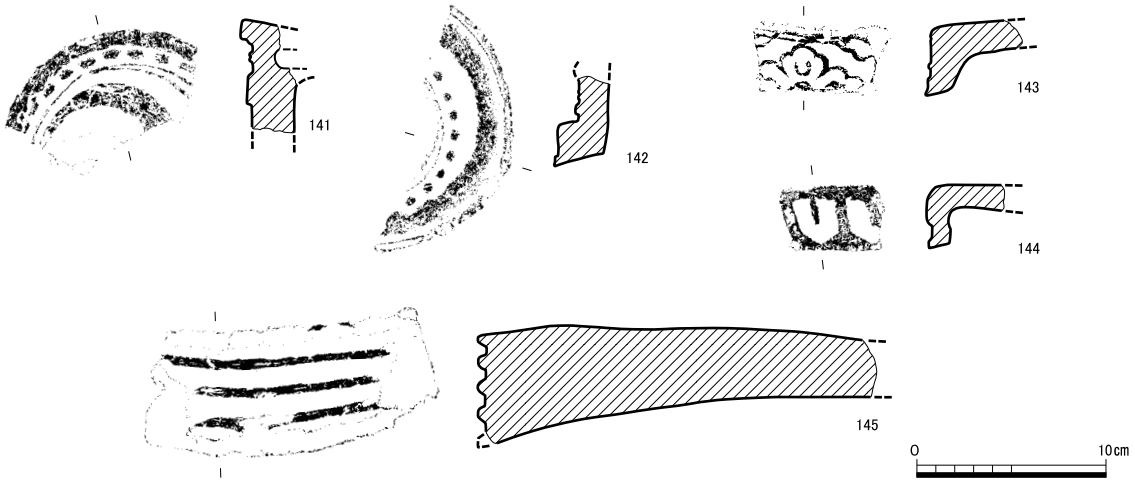



図31　出土軒瓦拓影・実測図（１：４）

**土坑84**（図30－139・140）　鎌倉時代の土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、焼締陶器の他に石製品が出土した。ほとんどが小片で図示できないが、焼締陶器大甕のタタキ文様をここに提示する。139・140は同一個体の体部とみられるが接合できない。139の外面は灰色であるが、140の外面は灰黄褐色で、焼成時の付着物がある。両方とも内面は黒色を呈する。内面はナデ調整を施す。タタキには、長方形の区画内に斜格子文とその中に円形浮文５個を配した叩き具を使用している。

## （３）瓦類（図31－141～145、表６）

各遺構から軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、塼などが出土した。全体の遺物出土量の中では１割程度で比較的少ない。その中でも、軒丸瓦は２点、軒平瓦は３点と少ない。

**軒丸瓦**　141・142は珠文付巴文軒丸瓦である。尾部は長く互いに接し界線となる。瓦当部側面はヨコナデ、裏面はナデ。丸瓦部は外れている。鎌倉時代から室町時代に属する。141は土坑258上層から、142は土坑282から出土した。

**軒平瓦**　143は半截花文を配する。曲線顎を持つ。胎土には砂粒を含み、赤褐色を呈する。平安時代後期に属する。井戸311枠内から出土した。144は剣頭文を配する。瓦当部成形は折り曲げ技法で、瓦当面および平瓦部凹面には布目、平瓦部凸面には縄目が残る。平安時代後期に属する。土坑285から出土した。145は周縁の欠損が多いが、三重弧文を配する。弧線断面は台形。直線顎を持つ。胎土は密で、焼成は良、灰色を呈する。奈良時代に属する。北東部掘り下げ中に出土した。

## （４）漆製品（図32－146、図版６）

146は漆皮製と考えられる容器である。出土時は全体が柔らかく、弾力があった。組織の顕微鏡観察によると、木や竹などの植物質ではないことがわかり、動物性の皮革と推測される。内外面に黒色の漆を施すことから、漆皮製品と考えた。上半部を欠損しており、現状は椀状である。内面には内容物と考えられる黒褐色軟質物が数cmの厚さで付着する。土坑229下層から出土した。

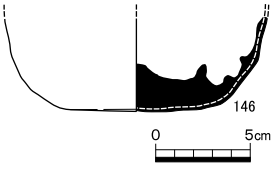



図32　出土漆製品実測図
（１：４）

## （５）銭貨（図33－147～152、図版６、表７）

平安時代から室町時代にかけて渡来銭が５枚と江戸時代に鋳造された国内銭が１枚出土している。

147～151は渡来銭である。147は天聖元寶（北宋、1023年初鋳）、土坑297から出土した。148は至和元寶（北宋、1054年初鋳）、攪乱15から出土した。149は元豊通寶（北宋、1078年初鋳）、攪乱54から出土した。150・151は永楽通寶（明、1408年初鋳）で、150は攪乱15、151は攪乱30から出土した。

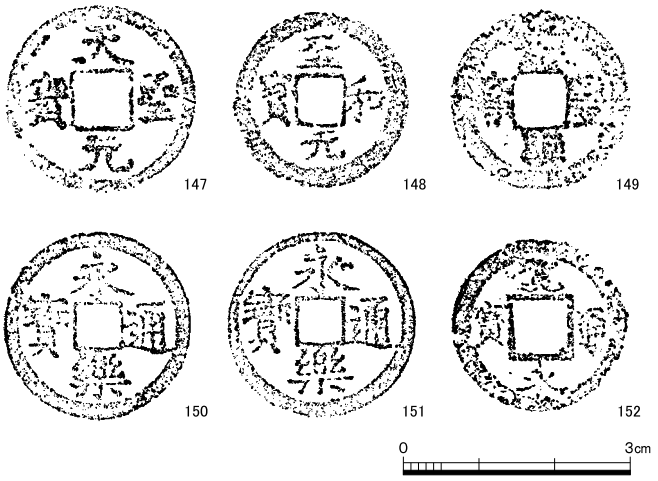



図33　出土銭貨拓影（１：１）

152は字体からⅠ期古寛永[12)]とされる寛永通寶（1636年初鋳）で、柱穴104から出土した。

## （６）石製品（図34－153～156、図版６）

石製品には、前述した石鍋（59・79）、砥石（153～156）がある。他には図示していないが攪乱坑から近世の石臼が出土した。

153～156は砥石である。砥石はいずれも小ぶりで、石材は砂岩である。長方形で箱型を呈するものと扁平なものがある。153は一方を欠損するが箱型直方体である。厚さ1.75cm、幅3.65cm、残存長辺10.25cm。平面と側面の３面は滑らかで磨滅する。側面には石材を切り出した際の線条痕がある。154・155は一方を欠損するが厚さ1.0cmの扁平な直方体である。平面は滑らかで磨滅する。側面には石材を切り出した際の線条痕がある。154は幅3.2cm、残存長辺7.3cm。155は幅3.75cm、残存長辺7.15cm、砥面が一部剥離している。156は両端を欠損するが箱形直方体である。厚さ2.2cm、幅2.8cm、残存長辺6.85cm。平面・側面とも滑らかで磨滅するが、一部に溝状の窪みが幾筋も形成される箇所がある。153は土坑84から、154～156は土坑229から出土した。

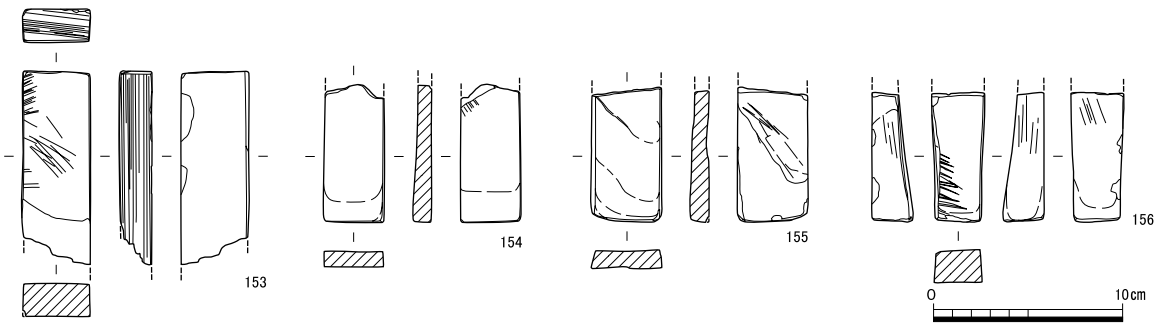



図34　出土石製品実測図（１：４）

# 5．まとめ

今回の調査では、小規模な調査区ながら、多くの遺構・遺物を検出した。遺構・遺物には平安時代末期から江戸時代初期のものがあるが、特に平安時代末期から鎌倉時代初期にかけてのもの、および鎌倉時代から室町時代初期にかけてのものが非常に多いことがわかった。検出した遺構には、柱穴や井戸、埋甕遺構などがあり、中世京都における町屋の様相の一端を明らかにすることができた。以下では、（1）で遺構の変遷、（2）で埋甕遺構についてまとめる。

## （1）遺構の変遷

本調査では、第２期を平安時代末期から鎌倉時代初期、第１期を鎌倉時代から室町時代末期と、２時期に分けて遺構検出を行ったが、出土した土器の年代観から、第１期についてはさらに３時期に細分できることがわかった。以下古い順に遺構の変遷をまとめる（図36）。

**＜２期＞平安時代末期から鎌倉時代初期**

この時代の遺構には整地層247、土坑272、井戸262・263・305・311などがある。整地層247は平安京左京南部一帯に広範囲に認められる平安時代後期の整地層と土層の状況が比較的に似ている。この整地層は後世の開発により削平され、その広がりは不明であるが、調査地の南には平清盛の邸宅である西八条第があり、その造営の頃に整地された土層の可能性がある。

また、調査区の東半では井戸が集中するものの、西半には井戸はなく、東半と西半では土地の利用に差異が認められ、調査区のほぼ中央に土地境界が想定される。前述したように、当十六町には多くの土地売券があることが知られている。その研究によると、12世紀中頃には四行八門に則らない地割りに変化しはじめ[13]、左京八条一坊十六町では南西の１/４町の班給画地が12世紀に塩小路に面して間口割され、半町の奥行きをもつ土地区画があった[14]（図35）などの指摘がある。今回の調査地もこの時期には七条大路に面して間口割され、奥行きをもつ土地に区画されていた可能性がある。

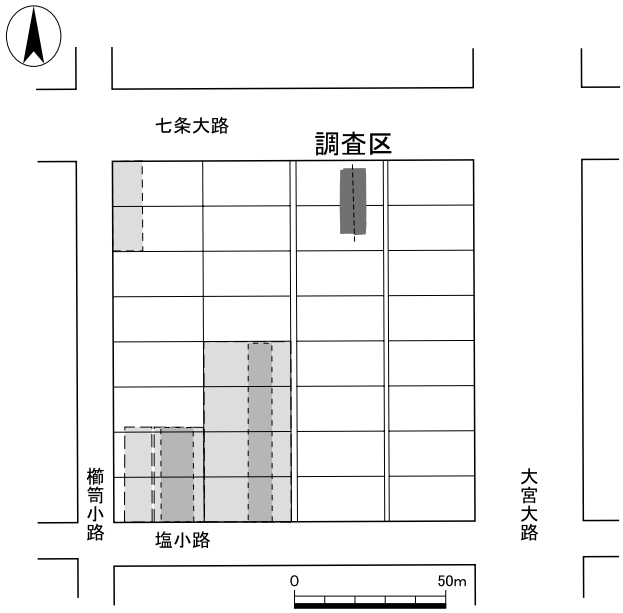


図35　左京八条一坊十六町宅地変遷推定図
『中世京都の町屋』図12に加筆

**＜１－３期＞鎌倉時代**

この時代の遺構・遺物は非常に多く、人々の活発な営みがあったとみられる。土坑229・282・285、柱穴群、井戸291・312、整地層126、埋甕遺構Ａなどがある。調査区東部では、柱穴・井戸・土坑などがあるが、西部では南で埋甕遺構Ａが形成されるが、北で大きく土取り（土坑285）が行われる。やはり前段階と同様に東西

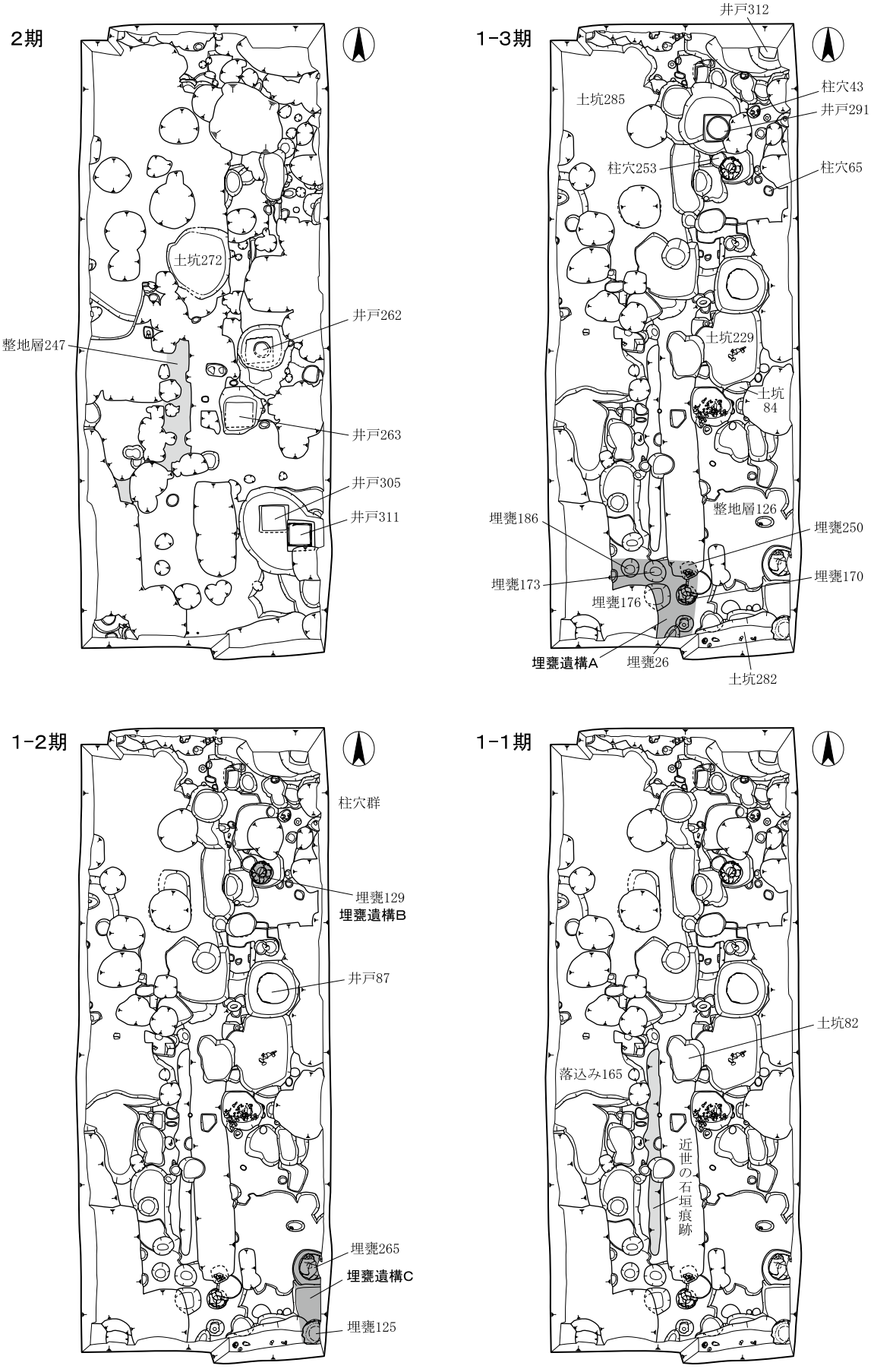



図36　遺構変遷図（１：200）

の中央を境として東側と西側で土地の使われ方に相違がある。埋甕遺構Ａの成立年代は出土した甕の年代観から12世紀後半であると考えられる。甕の内部から出土した土器は京都Ⅶ期中段階（14世紀初頭）で、このころ廃絶されたとみられる。

**＜１－２期＞鎌倉時代末期から室町時代初期**

この時代の遺構には、柱穴群、井戸87、埋甕遺構Ｂ・Ｃがある。埋甕遺構Ｃは、出土した常滑産大甕の年代観から常滑編年７～８期に属し、14世紀前半から中頃のものである。井戸87の出土遺物も京都Ⅶ期の最終段階のもので同じ時期のものであり、柱穴群・井戸87・埋甕遺構Ｃとは一体として捉えることができる。調査区東半部には七条大路に面した町屋があり、敷地の奥には甕倉を伴っていたとみられる。これらの遺構の上層から京都Ⅷ期（14世紀中頃）以降の土器は全く出土しておらず、この頃に廃絶したと考えられる。観応三年（1352）には後村上天皇軍と足利義詮軍との争乱[15)]があり、その影響を受けた可能性も考えられる。

なお、室町時代の遺構・遺物は極少ない。応永十三年（1406）の文書には七条大宮の畑地が南禅寺耕雲庵へ寄進される記事[16)]があるように、14世紀以降、この周辺は農地化[17)]していったのであろう。

**＜１－１期＞安土・桃山時代から江戸時代初期**

この時代の遺構も少なく、土坑82、落込み165があるのみである。花畑町の町名について、中古以来耕地であったが西本願寺の境内に入るに及び、仏供の花卉を栽培する園圃となったこと、あるいは西本願寺の境内になる以前に豊臣氏の花壇を設けた所であった[18)]などの説があるとおり、この地には田畑の様相を呈していたと考えられる。

その後の江戸時代の遺構には杭跡、根石、土坑、石垣痕跡、井戸などがある。移転してきた本願寺の隆盛に伴って賑わいを取り戻したのであろう。

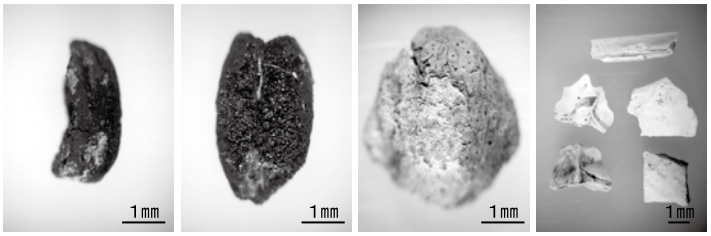
今回の調査地では、少なくとも平安時代末期には四行八門制に則っていない地割が成立したようで、調査地の中央に南北方向に土地境界が形成されている。この土地境界は鎌倉時代から室町時代、さらに、近代まで踏襲されてきたようである。

平安京成立以前の遺構は今回の調査では見つからなかったが、弥生土器が１片出土している。前述したように周辺には弥生時代から古墳時代にかけての集落跡である烏丸町遺跡や烏丸綾小路遺跡などがあり、これに関連したものと考えられる。また、遺構はみつからなかったが、平安時代前期から中期の緑釉陶器や灰釉陶器の破片が出土しており、東市周辺という立地からも、人々の営みはあったとみられる。平安時代後期の遺物はほとんどなく、これは東市の衰退に伴うものであるかもしれない。

## （２）埋甕遺構について

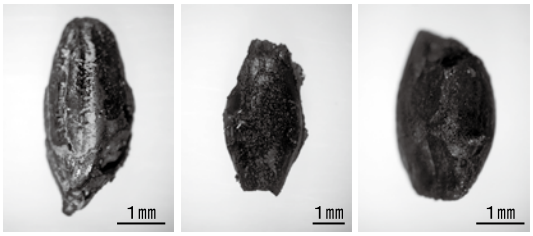
今回の調査では３箇所で埋甕遺構（Ａ・Ｂ・Ｃ）を検出した。これらの内、ＡとＣは全体の規模は不明ながら複数の大甕を整然と配置して据えており、甕倉と考えられる遺構である。Ａは平安時代末期から鎌倉時代の須恵質の甕を比較的浅く、近接して据えている。これに対してＣは室町時代の常滑産の甕を体部の約半分まで深く埋め込み、間隔も2.4ｍと広い。こうした違いが時期差であ

上層




炭化イネ種子　炭化オオムギ種子　サクラ属核　被熱骨

下層




炭化イネ種子　炭化オオムギ種子　炭化コムギ

図37　大甕135内検出種実・骨

表４　大甕135内検出種実・骨一覧表

| 種類 | 上層 | 下層 |
|---|---|---|
| イネ種子（炭化） | ２個 | ２個 |
| オオムギ種子（炭化） | ６個 | ８個 |
| コムギ種子（炭化） | — | ５個 |
| サクラ属核 | １個 | — |
| 不明骨（被熱） | ５片 | — |

るか、性格（内容物）の差であるかは判然としない。

ところで、Ｃの常滑産大甕134・135には漆を塗布してひび割れや石はぜを補修した痕跡が認められる。こうしたことから、この甕には何らかの液体が貯蔵されていたと考えられる。また、内容物を探るために大甕135に堆積していた土層をサンプリングし、土壌分析を行った。土層は概ね２層に分かれ、上層はやや粘質の黒褐色砂泥が混ざる褐灰色砂泥、下層はやや粘質のオリーブ黒色砂泥であった。上層を約0.9ℓ、下層を約0.6ℓ抽出、４・２・１㎜メッシュの篩を用いて水洗・選別を行ったところ、上層からは炭化したイネ・オオムギ、サクラ属核、被熱した骨（極小片のため種別不可能）などを検出、下層からは炭化したイネ・オオムギ・コムギを検出した。しかしながら、検出した穀類は多種におよび量も少ないことから、内容物とは考えがたく、埋没段階での混入とみられる。したがって、この分析では甕の内容物を示唆する知見を得ることはできなかった。

註

１）　土地売買文書に関しては以下の文献を参考にした。
　　１.寺升初代「平安京の土地売券」『古代學研究所紀要　第５輯』財団法人古代學協會　1995年
　　２.野口　徹『中世京都の町屋』財団法人東京大学出版会　1988年
　　３.林屋辰三郎、村井康彦、森谷剋久編『京都市の地名』平凡社　1979年
２）　『京都の歴史』第２巻　中世の明暗　京都市編　學藝書林　1971年
３）　小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第３号　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年。なお、平安京Ⅰ～Ⅴ期、京都Ⅵ～ⅩⅣ期を京都Ⅰ～ⅩⅣ期で統一した。
４）　森島康雄「６.瓦器椀」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　1995年
５）　木戸雅寿「13.石鍋」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　1995年
６）　前掲５）

7） 山本信夫「11.貿易陶磁器〔2〕中世前期の貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　1995年

8） 立石堅志「10.瓦質土器〔1〕奈良火鉢」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　1995年。この他、文化財保護課の新田和央氏よりご教示を賜った。

9） 前掲4）

10） 中野晴久「9.中世陶器〔2〕常滑・渥美」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　1995年

11） 柏田有香「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成24年度』京都市文化市民局　2013年

12） 『日本出土銭総覧1996年版』兵庫埋蔵銭調査会　1996年

13） 前掲1）の1
「12世紀中頃には、面積は一戸主に近似値であるが四行八門に則っていない地割りに変化してきている」「12世紀後半代になると、土地の地割りが道路に面して地口を持ち、奥に長いそれまでとは異質な形態に変化する」と指摘している。

14） 前掲1）の2
「三節　町屋の出現過程（事例二）」で史料からみた左京八条一坊十六町の宅地分割の実態について具体的に図示している。

15） 前掲2）

16） 『史料京都の歴史』第12巻　下京区　京都市編　平凡社　1994年
〔東京帝国博物館陳列古文書〕応永十三年二月十三日「寄進申永地之畠之地子事　字七条ヲミや（大宮）南ツラ……」とある。

17） 平安学園考古学クラブ「左京七条一坊十一町　平安京東市周辺の調査」『平安学園教育研究会研究論集44』 2003年

18） 前掲1）の3

表５　土器類観察表

| 番号 | 器種 | 器形 | 遺構名 | 口径(cm) | 器高(cm) | 底径(cm) | 残存(%) | 色調胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 灰釉系陶器 | 鉢 | 土坑272 | ― | (2.2) | ― | 破片 | 10YR6/2灰黄褐色　1㎜以下の長石・石英を含む | 内面に10YR1.7/1黒色の漆が付着 |
| 2 | 灰釉系陶器 | 鉢 | 土坑272 | ― | (3.6) | 10.1 | 破片 | 10YR7/2にぶい黄橙色　3㎜以下の長石・石英・チャートを含む | 内面に10YR1.7/1黒色の漆が付着 |
| 3 | 輸入白磁 | 椀 | 土坑272 | ― | (2.5) | 7.8 | 10 | 釉は7.5Y8/2灰白色、胎土は2.5Y8/2灰白色で密、焼成良 | 高台内に「林所(ヵ)」の墨書あり |
| 4 | 土師器 | 皿・小 | 井戸262 | 8.8 | 1.8 | | 100 | 10YR7/4にぶい黄橙色　1.5㎜以下の長石・石英・雲母・赤色粒子を含む | |
| 5 | 土師器 | 皿・小 | 井戸262枠内 | 8.9 | 1.6 | | 70 | 2.5Y7/2灰黄色　2㎜以下の長石・石英・雲母・赤色粒子を含む | |
| 6 | 土師器 | 皿・小 | 井戸262掘形 | 9.2 | 1.7 | | 40 | 2.5Y7/2灰黄色　2㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子を含む | |
| 7 | 土師器 | 皿・小 | 井戸262 | 9.6 | 1.7 | | 60 | 10YR7/4にぶい黄橙色　3㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子を含む | |
| 8 | 土師器 | 皿・小 | 井戸262 | 9.7 | 1.7 | | 100 | 10YR8/3浅黄橙色　1㎜以下の長石・石英・雲母・赤色粒子を含む | |
| 9 | 土師器 | 皿・小 | 井戸262 | 9.8 | 1.6 | | 50 | 2.5Y8/3浅黄色　1㎜以下の雲母・赤色粒子を含む | |
| 10 | 土師器 | 皿・小 | 井戸262曲物内 | 9.8 | 1.6 | | 40 | 7.5YR7/6橙色　1㎜以下の長石・雲母・赤色粒子を含む | |
| 11 | 土師器 | 皿・小 | 井戸262 | 9.9 | 1.6 | | 25 | 2.5Y7/2灰黄色　1㎜以下のチャート・雲母を含む | |
| 12 | 土師器 | 皿・小 | 井戸263上層 | 8.6 | 1.7 | | 95 | 10YR7/4にぶい黄橙色　1㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む | |
| 13 | 土師器 | 皿・小 | 井戸263上層 | 8.7 | 1.4 | | 50 | 7.5YR7/4にぶい橙色　1㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む | |
| 14 | 土師器 | 皿・小 | 井戸263上層 | 8.7 | 1.5 | | 33 | 10YR8/3浅黄橙色　1㎜以下の長石・石英・赤色粒子を含む | |
| 15 | 土師器 | 皿・小 | 井戸263上層 | 8.7 | 1.5 | | 80 | 7.5YR7/4にぶい黄橙色　1.5㎜以下の長石・チャート・雲母を含む | |
| 16 | 土師器 | 皿・小 | 井戸263上層 | 8.8 | 1.5 | | 40 | 10YR7/3にぶい黄橙色　1.5㎜以下の石英・チャート・雲母を含む | |
| 17 | 土師器 | 皿・小 | 井戸263上層 | 8.8 | 1.7 | | 40 | 10YR7/3にぶい黄橙色　1㎜以下の長石・石英・雲母を含む | |
| 18 | 土師器 | 皿・小 | 井戸263上層 | 8.9 | 1.6 | | 25 | 10YR8/3浅黄橙色　1㎜以下の石英・チャート・雲母を含む | |
| 19 | 土師器 | 皿・小 | 井戸263上層 | 8.9 | 1.9 | | 40 | 10YR7/3にぶい黄橙色　1㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む | |
| 20 | 土師器 | 皿・小 | 井戸263上層 | 9.0 | 1.5 | | 33 | 7.5YR7/4にぶい橙色　1㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子を含む | |
| 21 | 土師器 | 皿・小 | 井戸263上層 | 9.0 | 2.0 | | 50 | 10YR7/3にぶい黄橙色　1㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む | |
| 22 | 土師器 | 皿・小 | 井戸263上層 | 9.1 | 1.4 | | 25 | 2.5Y7/2灰黄色　1㎜以下のチャート・雲母を含む | |
| 23 | 土師器 | 皿・小 | 井戸263上層 | 9.1 | 1.5 | | 25 | 10YR8/3浅黄橙色　1㎜以下の長石・チャート・雲母を含む | |
| 24 | 土師器 | 皿・大 | 井戸263上層 | 12.8 | (2.6) | | 60 | 2.5Y7/3浅黄色　0.5㎜以下の雲母を含む | |
| 25 | 土師器 | 皿・大 | 井戸263上層 | 13.0 | (2.6) | | 40 | 7.5YR7/4にぶい橙色　1.5㎜以下の長石・チャート・雲母を含む | |

| 番号 | 器種 | 器形 | 遺構名 | 口径(cm) | 器高(cm) | 底径(cm) | 残存(%) | 色調胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 26 | 土師器 | 皿・大 | 井戸263上層 | 13.5 | 2.5 | | 10 | 7.5YR7/4にぶい橙色 1㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む | |
| 27 | 土師器 | 皿・大 | 井戸263上層 | 14.0 | 2.9 | | 66 | 7.5YR7/6橙色 2㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む | |
| 28 | 土師器 | 皿・大 | 井戸263上層 | 14.1 | (2.4) | | 40 | 10YR7/4にぶい黄橙色 1.5㎜以下の長石・チャート・雲母・赤色粒子を含む | |
| 29 | 土師器 | 皿・大 | 井戸263上層 | 14.3 | 2.4 | | 66 | 10YR7/3にぶい黄橙色 1㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む | |
| 30 | 土師器 | 皿・大 | 井戸263上層 | 13.7 | 3.2 | | 60 | 10YR8/2灰白色 3.5㎜以下の長石・チャートを含む | 白色系土師器 |
| 31 | 土師器 | 台付皿 | 井戸263上層 | 6.6 | (2.9) | | 33 | 7.5YR7/6橙色 1㎜以下の長石・雲母を含む | 皿部との接合面で剥離し台部のみ残存 |
| 32 | 瓦器 | 椀 | 井戸263上層 | 13.6 | 3.8 | 4.8 | 33 | N3/0暗灰色 1㎜以下の長石・石英・黒色粒子を含む | 輪状の暗文を施す |
| 33 | 瓦器 | 椀 | 井戸263上層 | 13.7 | 4.6 | 5.2 | 50 | N4/0灰色 1㎜以下の長石・石英・黒色粒子を含む | 連続長楕円状の暗文を施す |
| 34 | 瓦器 | 椀 | 井戸263上層 | 13.8 | (4.2) | | 16 | N4/0灰色 1㎜以下の長石・雲母を含む | 口縁端部内面にはヘラ状工具による沈線が１条めぐる |
| 35 | 瓦器 | 椀 | 井戸263上層 | 14.8 | (3.0) | | 25 | N4/0灰色 0.5㎜以下の雲母を含む | 口縁端部内面にはヘラ状工具による沈線が１条めぐる |
| 36 | 瓦器 | 羽釜 | 井戸263上層 | 20.2 | (4.3) | | 16 | 2.5Y5/1黄灰色 1.5㎜以下の石英・チャートを含む | |
| 37 | 瓦器 | 鍋 | 井戸263上層 | 26.1 | (11.9) | | 16 | N5/0灰色 2㎜以下の長石・石英・黒色粒子を含む | 外面に煤付着 |
| 38 | 土師器 | 皿・小 | 井戸305木枠内 | 8.6 | 1.7 | | 75 | 10YR8/3浅黄橙色 1㎜以下の長石・石英・赤色粒子を含む | |
| 39 | 土師器 | 皿・小 | 井戸305木枠内 | 9.0 | 1.5 | | 25 | 2.5Y7/2灰黄色 1㎜以下の長石・石英・雲母を含む | |
| 40 | 土師器 | 皿・小 | 井戸305木枠内 | 9.3 | 1.5 | | 25 | 2.5Y7/2灰黄色 1㎜以下の長石・石英・雲母を含む | |
| 41 | 土師器 | 皿・小 | 井戸305木枠内 | 9.4 | 1.5 | | 60 | 10YR8/3浅黄橙色 1㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む | |
| 42 | 土師器 | 皿・大 | 井戸305木枠内 | 13.0 | 2.4 | | 20 | 10YR8/3浅黄橙色 1㎜以下の長石・石英・赤色粒子を含む | |
| 43 | 土師器 | 皿・大 | 井戸305木枠内 | 13.0 | 2.4 | | 20 | 10YR8/3浅黄橙色 1㎜以下の長石・石英・雲母を含む | |
| 44 | 土師器 | 皿・大 | 井戸305木枠内 | 13.3 | 2.9 | | 33 | 10YR8/3浅黄橙色 2㎜以下の長石・石英・赤色粒子を含む | |
| 45 | 土師器 | 皿・大 | 井戸305木枠内 | 13.6 | 2.4 | | 20 | 10YR7/4にぶい黄橙色 1㎜以下の長石・石英・雲母を含む | |
| 46 | 輸入白磁 | 椀 | 井戸305木枠内 | ― | (2.7) | 5.6 | 10 | 釉は5Y7/1灰白色、胎土は5Y8/1灰白色で密、焼成良 | 高台内に墨書があるが欠損のため解読不能 |
| 47 | 土師器 | 皿 | 井戸311掘形 | 12.4 | 2.3 | | 12 | 10YR8/2灰白色 1㎜以下の長石・石英・雲母を含む | |
| 48 | 輸入白磁 | 椀 | 井戸311掘形 | 14.4 | (4.3) | ― | 30 | 釉は5Y7/3浅黄色、胎土は5Y8/1灰白色で密、焼成良 | 口縁端部は玉縁、体部外面下半は露胎 |
| 49 | 土師器 | 皿・小 | 土坑229 | 8.0 | 1.2 | | 60 | 10YR8/3浅黄橙色 1㎜以下の長石・石英・雲母・赤色粒子を含む | |
| 50 | 土師器 | 皿・小 | 土坑229 | 8.2 | 1.4 | | 50 | 7.5YR7/4にぶい橙色 3㎜以下の長石・石英・雲母を含む | |

| 番号 | 器種 | 器形 | 遺構名 | 口径(cm) | 器高(cm) | 底径(cm) | 残存(%) | 色調胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 51 | 土師器 | 皿・小 | 土坑229 | 8.3 | 1.0 | | 50 | 10YR8/3浅黄橙色　1㎜以下の長石・石英・雲母を含む | |
| 52 | 土師器 | 皿・小 | 土坑229 | 8.3 | 1.5 | | 100 | 2.5Y7/2灰黄色　1㎜以下の長石・石英・雲母を含む | 煤付着 |
| 53 | 土師器 | 皿・大 | 土坑229下層 | 11.3 | 2.1 | | 25 | 7.5YR7/4にぶい橙色　1㎜以下の長石・石英・雲母・赤色粒子を含む | |
| 54 | 土師器 | 皿・大 | 土坑229 | 11.5 | 1.9 | | 25 | 10YR8/2灰白色　1㎜以下の長石・石英・雲母を含む | |
| 55 | 土師器 | 皿・大 | 土坑229 | 12.1 | 2.0 | | 12 | 7.5YR7/4にぶい橙色　1㎜以下の長石・石英・雲母・チャート・赤色粒子を含む | |
| 56 | 土師器 | 皿・大 | 土坑229 | 12.1 | 3.1 | | 16 | 10YR8/1灰白色　1㎜以下の長石・石英・雲母を含む | 白色系土師器 |
| 57 | 土師器 | ミニチュア羽釜 | 土坑229下層 | 5.0 | 2.0 | | 60 | 10YR8/3浅黄橙色　1㎜以下の石英を含む | |
| 58 | 瓦器 | 鍋 | 土坑229 | 24.8 | (8.9) | | 25 | 5Y7/1灰白色　1㎜以下の石英・チャートを含む | |
| 59 | 滑石製品 | 鍋 | 土坑229 | 21.9 | (3.7) | | 25 | 5Y7/3浅黄色　滑石製、外面は7.5Y2/1黒色 | |
| 60 | 輸入青白磁 | 小壷の蓋 | 土坑229上層 | 4.0 | 1.0 | | 33 | 釉は5G7/1明緑灰色、胎土はN8/10灰白色で密 | 華南産 |
| 61 | 輸入青磁 | 椀 | 土坑229 | 15.5 | 6.8 | 4.9 | 80 | 釉は明オリーブ灰色、胎土はN8/0灰白色で密 | 龍泉窯系 |
| 62 | 輸入青磁 | 香炉 | 土坑229 | 13.3 | 7.7 | | 25 | 釉は7.5Y7/1明緑灰色、胎土はN8/0灰白色で密 | 龍泉窯系 |
| 63 | 輸入陶器 | 鉢 | 土坑229下層 | 19.5 | (3.5) | | 7 | 釉は緑色、胎土は10YR8/2灰白色　1㎜以下の石英・チャート・赤色粒子を含む | 華南産 |
| 64 | 土師器 | 皿・小 | 土坑282粘土層 | 7.8 | (1.7) | | 40 | 2.5Y8/2灰白色　1㎜以下の石英・チャート・雲母を含む | |
| 65 | 土師器 | 皿・小 | 土坑282粘土層 | 8.0 | 1.5 | | 25 | 2.5Y7/3浅黄色　2㎜以下の石英・雲母・赤色粒子を含む | |
| 66 | 土師器 | 皿・小 | 土坑282粘土層 | 8.1 | 1.7 | | 80 | 2.5Y8/2灰白色　1.5㎜以下のチャート・雲母を含む | |
| 67 | 土師器 | 皿・小 | 土坑282粘土層 | 8.3 | 1.6 | | 60 | 2.5Y7/2灰黄色　1㎜以下の長石・チャート・雲母を含む | |
| 68 | 土師器 | 皿・小 | 土坑282粘土層 | 8.4 | 1.5 | | 40 | 2.5Y7/2灰黄色　3㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む | |
| 69 | 土師器 | 皿・小 | 土坑282粘土層 | 8.4 | 1.7 | | 60 | 2.5Y7/2灰黄色　1.5㎜以下の長石・石英・雲母を含む | |
| 70 | 土師器 | 皿・小 | 土坑282粘土層 | 8.4 | 1.7 | | 40 | 2.5Y7/2灰黄色　1.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む | |
| 71 | 土師器 | 皿・小 | 土坑282粘土層 | 8.6 | 1.2 | | 50 | 2.5Y7/2灰黄色　3㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む | |
| 72 | 土師器 | 皿・大 | 土坑282粘土層 | 10.9 | 2.1 | | 25 | 10YR7/3にぶい黄橙色　2.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む | |
| 73 | 土師器 | 皿・大 | 土坑282粘土層 | 11.0 | 2.0 | | 20 | 10YR8/3浅黄橙色　1㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む | |
| 74 | 土師器 | 皿・大 | 土坑282粘土層 | 11.8 | 2.2 | | 25 | 2.5Y7/2灰黄色　2㎜以下の長石・石英・チャートを含む | |
| 75 | 土師器 | 皿・大 | 土坑282 | 12.0 | 2.1 | | 50 | 10YR7/3にぶい黄橙色　2㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む | |

| 番号 | 器種 | 器形 | 遺構名 | 口径(cm) | 器高(cm) | 底径(cm) | 残存(%) | 色調胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 76 | 土師器 | 皿・大 | 土坑282 | 13.1 | 2.1 | | 25 | 2.5Y7/3浅黄色　1㎜以下の石英・チャート・雲母を含む | |
| 77 | 土師器 | 皿・大 | 土坑282粘土層 | 11.2 | (2.5) | | 25 | 2.5Y8/2灰白色　1㎜以下の石英・雲母を含む | 白色系土師器 |
| 78 | 灰釉系陶器 | 鉢 | 土坑282 | 30.6 | 12.0 | 13.0 | 12 | N7/10灰白色　6.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む | |
| 79 | 滑石製品 | 鍋 | 土坑282 | 17.3 | 7.8 | 13.7 | 100 | N4/灰色　滑石製、外面はN1.5/黒色 | 底部外面に煤付着 |
| 80 | 輸入青磁 | 椀 | 土坑282 | 15.5 | 6.2 | 4.2 | 50 | 釉は7.5Y5/2灰オリーブ色、胎土はN7/1灰白色でやや粗 | 龍泉窯系、二次被熱を受けている |
| 81 | 輸入青磁 | 椀 | 土坑282上層 | 16.2 | 6.8 | 4.7 | 90 | 釉は5GY7/1明灰オリーブ色、胎土はN7/0灰白色で密 | 龍泉窯系　底部内面に陰刻で草花文を施す |
| 82 | 輸入青磁 | 椀 | 土坑282 | 16.2 | (5.3) | | 60 | 釉は7.5Y6/2灰オリーブ色、胎土はN7/1灰白色で密 | 龍泉窯系 |
| 83 | 輸入白磁 | 皿 | 土坑282粘土層 | 9.8 | 1.8 | | 25 | 釉は10Y7/1灰白色、胎土はN8/0灰白色で密 | 口禿 |
| 84 | 輸入白磁 | 皿 | 土坑282 | 10.0 | 1.9 | | 33 | 釉は10GY明緑灰色、胎土はN8/0灰白色で密 | 口禿 |
| 85 | 土師器 | 皿・小 | 土坑285 | 7.8 | 1.3 | | 33 | 7.5YR7/4にぶい橙色　3㎜以下の長石・石英・雲母・チャートを含む | |
| 86 | 土師器 | 皿・小 | 土坑285 | 8.0 | 1.5 | | 50 | 7.5YR7/4にぶい橙色　2㎜以下の長石・石英・雲母を含む | |
| 87 | 土師器 | 皿・小 | 土坑285上層 | 8.1 | 1.2 | | 50 | 10YR7/3にぶい黄橙色　1㎜以下の長石・石英・雲母を含む | |
| 88 | 土師器 | 皿・小 | 土坑285 | 8.4 | 1.3 | | 66 | 10YR8/2灰白色　1㎜以下の長石・石英を含む | |
| 89 | 土師器 | 皿・大 | 土坑285 | 12.0 | 1.8 | | 16 | 7.5YR7/4にぶい橙色　1㎜以下の長石・石英・赤色粒子を含む | |
| 90 | 土師器 | 皿・大 | 土坑285 | 12.2 | 2.1 | | 33 | 10YR8/3浅黄橙色　1㎜以下の長石・石英を含む | |
| 91 | 土師器 | 皿・大 | 土坑285 | 12.2 | 2.8 | | 50 | 10YR8/2灰白色　1㎜以下の長石・石英・チャートを含む | |
| 92 | 土師器 | 皿・大 | 土坑285 | 12.3 | 2.0 | | 16 | 7.5YR7/4にぶい橙色　3㎜以下の長石・石英・赤色粒子を含む | |
| 93 | 土師器 | 皿・小 | 土坑285 | 7.4 | 2.2 | | 100 | 2.5Y8/2灰白色　1㎜以下の長石・石英・チャートを含む | 白色系土師器 |
| 94 | 土師器 | 皿・小 | 土坑285 | 7.5 | 2.2 | | 90 | 2.5Y8/2灰白色　1㎜以下の長石・石英・雲母を含む | 白色系土師器 |
| 95 | 土師器 | 皿・大 | 土坑285上層 | 10.6 | 3.0 | | 25 | 10YR8/2灰白色　1㎜以下の長石・石英・チャートを含む | 白色系土師器 |
| 96 | 土師器 | 皿・大 | 土坑285 | 10.8 | 3.0 | | 95 | 10YR8/2灰白色　1㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む | 白色系土師器 |
| 97 | 土師器 | 皿・大 | 土坑285 | 12.7 | 3.2 | | 83 | 10YR8/2灰白色　1㎜以下の長石・石英・チャートを含む | 白色系土師器 |
| 98 | 土師器 | 皿・大 | 土坑285 | 12.8 | 3.2 | | 100 | 10YR8/1灰白色　3㎜以下の長石・石英・チャートを含む | 白色系土師器 |
| 99 | 土師器 | ミニチュア羽釜 | 土坑285 | 5.6 | (3.1) | | 25 | 10YR8/2灰白色　1㎜以下の石英・雲母を含む | |
| 100 | 瓦器 | 皿 | 土坑285 | 9.2 | 1.6 | | 66 | N3/0暗灰色　1㎜以下の長石・石英・黒色粒子を含む | |

| 番号 | 器種 | 器形 | 遺構名 | 口径（cm） | 器高（cm） | 底径（cm） | 残存（%） | 色調胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 101 | 瓦器 | 羽釜 | 土坑285 | 17.0 | (6.5) | — | 50 | N3/0暗灰色　焼成良　胎土密　1㎜以下の長石・石英を含む | |
| 102 | 瓦器 | 鍋 | 土坑285上層 | 23.4 | (8.1) | | 25 | 5Y7/1灰白色　1㎜以下の石英・チャート・雲母を含む | 外面下半に煤付着 |
| 103 | 瓦器 | 火鉢 | 土坑285 | 47.2 | 10.5 | 38.0 | 50 | 7.5YR6/3にぶい褐色　焼成良　胎土密　1㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む | 樟葉産 |
| 104 | 土師器 | 皿・小 | 整地層126 | 8.0 | 1.4 | | 80 | 10YR7/4にぶい黄橙色　1㎜以下の雲母・赤色粒子を含む | |
| 105 | 土師器 | 皿・小 | 整地層126 | 8.0 | 1.2 | | 100 | 7.5YR7/4にぶい橙色　3㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む | |
| 106 | 土師器 | 皿・小 | 整地層126 | 8.2 | 1.4 | | 20 | 2.5Y7/3浅黄色　0.5㎜以下の長石・雲母を含む | |
| 107 | 土師器 | 皿・小 | 整地層126 | 8.3 | 1.5 | | 80 | 7.5Y7/3浅黄色　1㎜以下の長石・チャート・赤色粒子・雲母を含む | |
| 108 | 土師器 | 皿・小 | 整地層126 | 8.4 | 1.7 | | 66 | 7.5YR7/4にぶい橙色　1㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子を含む | |
| 109 | 土師器 | 皿・大 | 整地層126 | 11.7 | (2.1) | | 60 | 2.5Y7/3浅黄色　1㎜以下の長石・チャート・雲母を含む | |
| 110 | 土師器 | 皿・大 | 整地層126 | 12.1 | 1.9 | | 90 | 10YR7/3にぶい黄橙色　3㎜以下の長石・雲母・赤色粒子を含む | |
| 111 | 土師器 | 皿・大 | 整地層126 | 12.2 | 2.1 | | 25 | 10YR7/3にぶい黄橙色　0.5㎜以下のチャート・雲母・赤色粒子を含む | |
| 112 | 土師器 | 皿・大 | 整地層126 | 12.3 | 1.9 | | 25 | 10YR7/4にぶい黄橙色　1.5㎜以下の長石・赤色粒子を含む | |
| 113 | 土師器 | 皿・大 | 整地層126 | 12.3 | (2.2) | | 33 | 10YR8/2灰白色　3㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子を含む | |
| 114 | 土師器 | 皿・大 | 整地層126 | 10.9 | 3.2 | | 80 | 2.5Y8/2灰白色　0.5㎜以下の雲母を含む | 白色系土師器 |
| 115 | 土師器 | 皿・小 | 井戸312 | 8.8 | 1.6 | | 66 | 10YR7/3にぶい黄橙色　1㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子を含む | |
| 116 | 土師器 | 皿・大 | 井戸291 | 11.8 | 2.9 | | 16 | 2.5Y8/1灰白色　1㎜以下の長石・石英を含む | 白色系土師器 |
| 117 | 土師器 | 羽釜 | 井戸291 | 22.4 | (6.4) | | 16 | 10YR4/1褐灰色　4㎜以下の長石・石英を含む | |
| 118 | 土師器 | 皿・小 | 井戸87上層 | 7.8 | (1.6) | | 40 | 7.5YR7/2明褐灰色　1㎜以下の長石・石英・赤色粒子を含む | |
| 119 | 土師器 | 皿・大 | 井戸87上層 | 11.2 | (3.0) | | 25 | 2.5Y8/1灰白色　1㎜以下の長石・チャート・雲母を含む | 白色系土師器 |
| 120 | 土師器 | 皿・大 | 井戸87上層 | 11.9 | (2.8) | | 16 | 10YR8/2灰白色　1㎜以下の長石・雲母を含む | 白色系土師器 |
| 121 | 土師器 | 皿・小 | 柱穴43 | 9.0 | (1.8) | | 25 | 10YR7/4にぶい黄橙色　1.5㎜以下のチャート・雲母・赤色粒子を含む | |
| 122 | 土師器 | 皿・小 | 柱穴253 | 8.8 | 1.6 | | 25 | 7.5YR7/4にぶい橙色　1㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む | |
| 123 | 土師器 | 皿・小 | 柱穴253 | 8.9 | 1.5 | | 50 | 10YR8/3浅黄橙色　1㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む | |
| 124 | 土師器 | 皿 | 柱穴65 | — | 2.4 | | 10 | 7.5YR7/4にぶい橙色　1㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子を含む | |
| 125 | 土師器 | 皿・小 | 柱穴65 | 9.8 | (1.5) | | 16 | 10YR7/4にぶい黄橙色　1㎜以下のチャート・雲母を含む | |

| 番号 | 器種 | 器形 | 遺構名 | 口径（cm） | 器高（cm） | 底径（cm） | 残存（%） | 色調胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 126 | 瓦器 | 椀 | 柱穴65 | 12.8 | (3.1) | | 16 | N4/0灰色　0.5㎜以下のチャートを含む | |
| 127 | 輸入白磁 | 壷蓋 | 柱穴65 | 3.1 | 1.0 | | 80 | 釉は2.5GY灰白色、胎土はN8/0灰白色で密、焼成良 | |
| 128 | 焼締陶器 | 甕 | 埋甕26 | — | (11.0) | 19.0 | 底部のみ | 10YR4/1褐灰色　4㎜以下の長石・石英・チャート・黒色粒子を含む | 埋甕遺構Ａ出土<br>常滑産 |
| 129 | 須恵質陶器 | 甕 | 埋甕170 | — | (25.2) | — | 底部のみ | N4/0灰色　3.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む | 埋甕遺構Ａ出土<br>勝間田焼か |
| 130 | 須恵質陶器 | 甕 | 埋甕250 | — | (35.3) | | 底部のみ | N5/0灰色　1㎜以下の長石・チャートを含む | 埋甕遺構Ａ出土<br>勝間田焼か |
| 131 | 土師器 | 皿・小 | 埋甕170 | 7.8 | 1.1 | | 20 | 2.5Y7/2灰黄色　1㎜以下の長石・石英・雲母を含む | 埋甕遺構Ａ出土 |
| 132 | 土師器 | ミニチュア羽釜 | 埋甕170 | 11.3 | (2.9) | | 25 | 10YR8/2灰白色　胎土は密で焼成は良 | 埋甕遺構Ａ出土 |
| 133 | 焼締陶器 | 甕 | 埋甕129 | 46.0 | 上部29.8<br>下部35.0 | 42.8 | 80 | 7.5YR5/1褐灰色　5㎜以下の長石・石英・チャートを含む | 埋甕遺構Ｂ出土<br>備前産<br>胴部最大径は69.0cm |
| 134 | 焼締陶器 | 甕 | 埋甕265 | 45.2 | 83.9 | 21.9 | 90 | 5YR4/3にぶい赤褐色～10YR5/4にぶい黄褐色　8㎜以下の長石・石英・チャートを含む | 埋甕遺構Ｃ出土<br>常滑産<br>肩部最大径は88.6cm<br>漏れ止めに漆を施す |
| 135 | 焼締陶器 | 甕 | 埋甕125 | 46.0 | 85.9 | 27.0 | 90 | 10YR3/2黒褐色　3㎜以下の長石・石英・チャートを含む | 埋甕遺構Ｃ出土<br>常滑産<br>肩部最大径は97.0cm<br>漏れ止めに漆を施す |
| 136 | 施釉陶器 | 椀 | 土坑82 | 9.0 | 5.0 | 3.9 | 66 | 釉は7.5YR3/2黒褐色、胎土は2.5Y8/3淡黄色で密、1㎜以下の長石・石英・チャートを含む | 瀬戸美濃産天目茶椀 |
| 137 | 土師器 | 鉢 | 落込み165 | 9.6 | 9.3 | 4.7 | 33 | 7.5YR7/3にぶい橙色　1㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む | 指頭圧痕や粘土紐の痕が残る |
| 138 | 施釉陶器 | 椀 | 落込み165 | 9.9 | (4.3) | — | 50 | 釉は5Y5/3灰オリーブ色、胎土は7.5YR7/4にぶい橙色で密、焼成良、1㎜以下の長石・チャートを含む | 唐津産 |
| 139 | 焼締陶器 | 甕 | 土坑84 | — | (13.1) | | 破片 | N4/0灰色　3㎜以下の長石・石英を含む | 長方形の区画内に斜格子文とその中に円形浮文５個を配した叩き具を使用 |
| 140 | 焼締陶器 | 甕 | 土坑84 | — | (12.2) | | 破片 | 10YR4/2灰黄褐色　5㎜以下の長石・石英を含む | 長方形の区画内に斜格子文とその中に円形浮文５個を配した叩き具を使用 |

表６　軒瓦観察表

| 番号 | 種類 | 遺構名 | 文様および手法の特徴 | 色調・焼成・胎土 | 年代 |
|---|---|---|---|---|---|
| 141 | 軒丸瓦 | 井戸263<br>上層 | 珠文付巴文。尾部は長く互いに接し界線となる。珠文が密に巡る。瓦当部側面はヨコナデ、裏面はナデ。丸瓦部は外れている。 | N2/0黒色、焼成良、胎土密、2㎜以下の長石・石英・チャートを含む。 | 鎌倉～室町時代 |
| 142 | 軒丸瓦 | 土坑282 | 珠文付巴文。尾部は長く互いに接し界線となる。珠文が巡る。瓦当部側面はヨコナデ、裏面はナデ。丸瓦部は外れている。 | N4/0灰色、焼成良、胎土密、2㎜以下の長石・石英・チャート・黒色粒子を含む。 | 鎌倉～室町時代 |
| 143 | 軒平瓦 | 井戸311<br>枠内 | 半截花文を配する。曲線顎を持つ。瓦当部凹布目、顎部凸面ヨコナデ。端部欠損のため不明。 | 7.5YR3/2黒褐色、焼成良、胎土密、3㎜以下の長石・石英・赤色粒子を含む。 | 平安時代後期 |
| 144 | 軒平瓦 | 土坑285 | 剣頭文を配する。瓦当面に布目残る。瓦当部成形は折曲げ技法。側面はケズリ、裏面はナデ。平瓦部凹面には布目、凸面には縄目が残る。 | N5/0灰色、焼成良、胎土密、4㎜以下の長石・石英・チャートを含む。 | 平安時代後期 |
| 145 | 軒平瓦 | 北東部<br>掘下げ | 三重弧文を配する。弧線断面は台形。直線顎。周縁は欠損が多い。平瓦部凹面はケズリ、一部布目残る。凸面はケズリのちナデ。 | N4/0灰色、焼成良、胎土密、3㎜以下の長石・チャートを含む。 | 奈良時代 |

表７　銭貨観察表

| 番号 | 種類 | 遺構名 | 外径(㎜) | 穿孔径(㎜) | 重量(ｇ) | 初鋳年・備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 147 | 天聖元寶(真書) | 土坑297 | 25.25 | 6.70 | 3.579 | 北宋、天聖元年(1023)初鋳。錆びなし。 |
| 148 | 至和元寶(真書) | 攪乱15 | 23.80 | 6.05 | 2.914 | 北宋、至和元年(1054)初鋳。錆び激しい。 |
| 149 | 元豊通寶(篆書) | 攪乱54 | 24.15 | 6.55 | 2.891 | 北宋、元豊元年(1078)初鋳。錆激しい。 |
| 150 | 永楽通寶 | 攪乱15 | 25.05 | 5.45 | 3.382 | 明、永楽６年(1408)初鋳。錆なし。 |
| 151 | 永楽通寶 | 攪乱30 | 25.00 | 5.20 | 3.271 | 明、永楽６年(1408)初鋳。錆なし。 |
| 152 | 寛永通寶 | 柱穴104 | 23.05 | 6.95 | 2.796 | Ⅰ期古寛永。寛永元年(1636)初鋳。錆激しい。 |

# 図　　版

1　第２期全景（南東から）

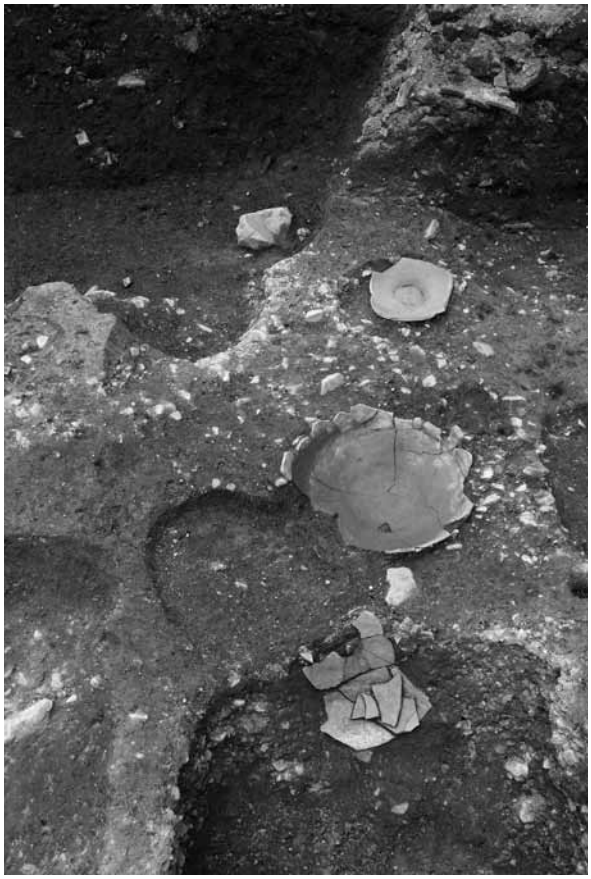
2　井戸262（西から）

3　井戸311（西から）

1　第１期全景（南東から）

2　井戸263上層遺物出土状況（東から）

3　井戸312検出状況（南から）



1　埋甕遺構Ａ（北から）

2　埋甕遺構Ｂ（東から）

3　埋甕遺構Ｃ（北西から）

4　土坑282（東から）

4

8

12

24

30

33

37

38

44

48

49

52

57

58

60

61

62

出土土器類 1

66

67

75

79

81

82

84

86

88

93

94

99

100

96

98

101

102

出土土器類２

# 図版6　遺物

104

105

107

109

114

115

117

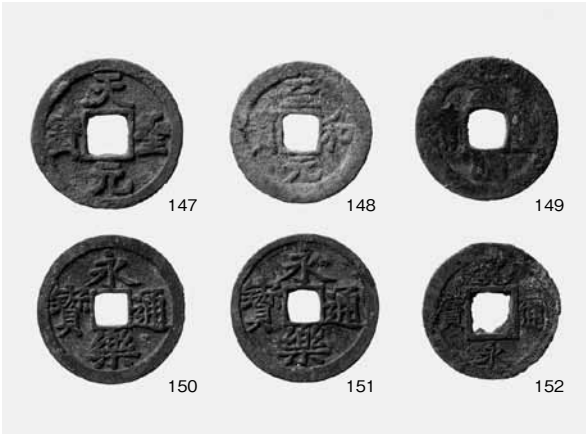
123

127

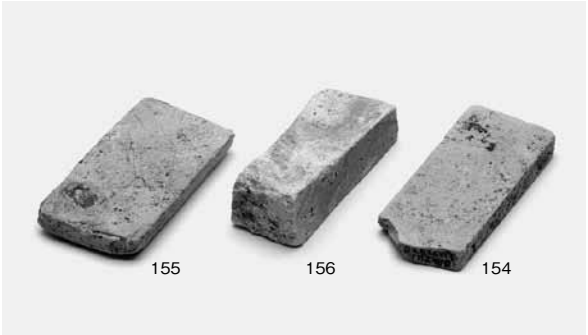
136

137

146


147 148 149 150 151 152

153


155 156 154

出土土器類３、漆製品、銭貨、石製品

134外面

134内面

埋甕遺構出土陶器甕１

135

128

129

130

133上半

133下半

埋甕遺構出土陶器甕２

# 報　告　書　抄　録

| | |
|---|---|
| ふ り が な | へいあんきょうさきょうはちじょういちぼうじゅうろくちょうあと |
| 書　　名 | 平安京左京八条一坊十六町跡 |
| シ リ ー ズ 名 | 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 |
| シリーズ番号 | ２０１３－１６ |
| 編 著 者 名 | モンペティ恭代 |
| 編 集 機 関 | 公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所 |
| 所　在　地 | 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1 |
| 発　行　所 | 公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所 |
| 発 行 年 月 日 | 西暦2014年６月30日 |

| 所収遺跡名（ふりがな） | 所在地（ふりがな） | コード 市町村 | コード 遺跡番号 | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 平安京跡（へいあんきょうあと） | 京都市下京区（きょうとしししもぎょうく）<br>七条通大宮西入（しちじょうどおりおおみやにしいる）<br>花畑町86、86-1（はなばたけちょう） | 26100 | 1 | 34度<br>59分<br>20秒 | 135度<br>44分<br>55秒 | 2014年２月17日～2014年３月19日 | 190㎡ | 共同住宅建設工事 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 平安京跡 | 都城跡 | 弥生時代 | | 弥生土器 | |
| | | 平安時代末期～鎌倉時代初期 | 整地層、土坑、井戸 | 土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、灰釉系陶器、瓦器、輸入陶磁器、焼締陶器、瓦、銭貨、石製品 | |
| | | 鎌倉時代～室町時代初期 | 整地層、柱穴群、土坑、井戸、埋甕遺構 | 土師器、須恵器、灰釉系陶器、瓦器、輸入陶磁器、須恵質陶器、焼締陶器、瓦、漆製品、銭貨、石製品 | |
| | | 安土・桃山時代～江戸時代初期 | 土坑、落込み | 土師器、焼締陶器、施釉陶器、銭貨、金属製品、石製品 | |

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2013-16

# 平安京左京八条一坊十六町跡

発行日　2014年6月30日

編　集
発　行　公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435　TEL 075-415-0521
http://www.kyoto-arc.or.jp/

印　刷　三星商事印刷株式会社

住　所　京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093　TEL 075-256-0961